

本稿は、創価学会の前身、創価教育学会に籍を置き、その活動の重要な一分野であった出版クラブで筆談を誓めることによつて、創価教育学会の裏も表も知り尽くすことになつた。一幹事の遺稿であるが、しかし、完成された原稿ではなく、草稿と思われ、元原稿には補足や訂正がびつしり書き込まれてゐるからだ。

本稿は、ある創価教育学会幹部の遺族の手元に残されてゐた。その入手経路については、その遺族もすでに他界され、対口委員の半藤信二が知る術もなぬが、著者が生時、原稿を完成しなはれず、そのままの状態で後事を託したのかもしれない。

創価教育学会の回想

――私が接した牧口会長・戸田理事長の実像

福田 久 道

家庭生活では、最初の妻とはその不慮の死に離れ、第二の妻と結婚して、それから二十五年かかつたようだ。夫ともどもに、信心には熱目を燃やしてゐた。夫

入信以降の経歴については本文に詳しいが、著者の言に採、創価教育学会の古い換えれば、牧口常三郎会長、戸田城外理事長の思想や行動は、今日、創価学会によつて喧伝されるような偉大な思想家、宗教育家とは似ても似つかぬ。「狂信」や「狂言」を禁めた特異な宗義家と映つたやうで、それを象徴するかのやうな信

個層し上げの現場に遭遇したこと、後日、教育学会を去ることになつた。その後、法華講としてお寺中心の

目次

藤田八重

解 説 3

入信から退会まで 10

牧口会長の学説について 35

本稿は、創価学会の前身、創価教育学会に籍を置き、その活動の重要な一分野であった出版クラブで辛酸を嘗めることによつて、創価教育学会の裏も表も知り尽くすことになつた、一幹部の遺稿である。しかし、完成された原稿ではなく、草稿と思われる。元原稿には補足や訂正がびっしり書き込まれているからだ。

本稿は、ある創価教育学会幹部の遺族の手に残されていた。その入手経路については、その遺族もすでに他界されているので今となつては知る術もないが、著者が生前、原稿を完成しないままその遺族に後事を託したのかもしれない。

著者の福田久道氏は六芸社という、主にヨーロッパの文学や芸術を紹介する出版を手がけ、自身翻訳を事業としてもしていたようだ。しかし今日でもそうであるように、海外の翻訳物の出版はよほどマスコミで話題にでもならない限り、地味で儲からないと相場が決まつている。そこで、金融で利潤を上げていた戸田城外（後の城聖）理事長から多額の借金をし、起死回生を図ろうとするのだが、それでも福田氏はヨーロッパの文学や芸術の啓蒙にその情熱を傾け、相変わらず利益の向上には結び付かなかつた。こうした一途さ、純粹さが、価値論によつて実利を追求する出版クラブの指導と乖離し、後に同クラブの中で福田氏を孤立させ、指弾される立場に追いやることになつた。

家庭生活では、最初の妻とはその不貞ゆえに離婚、後に再婚したが、子宝には恵まれなかつたようだ。夫婦ともに、信心には熱心に励んでいた。

入信以降の経歴については本文に詳しいが、著者の目には、創価教育学会、言い換えれば、牧口常三郎会長、戸田城外理事長の思想や行動は、今日、創価学会によつて喧伝されるような偉大な思想家、宗教家とは似ても似つかぬ、「狂信」や「独善」を秘めた特異な宗教家と映つたやうで、それを象徴するかのやうな僧侶吊し上げの現場に遭遇したことで後日、教育学会を去ることになつた。その後、法華講としてお寺中心の

信仰に励み、戦後戸田氏が創価学会を再建しても二度と戻ることはなかった。

*

本稿は二部構成で、その内容から判断すると、第一部は戦前、即ち昭和二十年の太平洋戦争終戦前に記され、第二部は戦後間もない頃、創価学会再建前に書き綴られたもののようなようだ。記述内容の信憑性については、註で多数引用しているように、教育学会の公的出版物である「大善生活実証録」記載の事項と幾多の点で符合しているので、事実と信じてよいものである。

第一部では、創価教育学会中枢部での体験——罰論を強引に用いた布教法、退転者の続出、信心と事業を絡めた出版クラブの活動、戸田氏の破天荒な言動、僧侶吊上げ事件等々——を記し、牧口会長がその独創的な価値創造説に基づいて組織した創価教育学会が、その信仰の母体である日蓮正宗とは異質なものであることが語られている。この点については、牧口会長自身、戦後公表された特高警察の尋問調書の中で、「私は正式の僧籍を持つ事は嫌ひであります。僧籍を得て寺を所有する事になれば、従つて日蓮正宗の純教義的な形に嵌つた行動しか出来ません。私の価値創造論をお寺に於て宣伝説教する訳には参りませんので、私は矢張り在家の形で日蓮正宗の信仰理念に価値論を採入れた処に私の価値がある訳で、此処に創価教育学会の特異性があるのであります」（「特高月報」昭和18年8月分）と自任している。

戦後、戸田城聖（城外改め）氏によつて再建された創価学会は、教育学会時代の罰論に代わり、利益論を表に掲げ、「広宣流布」をキャッチフレーズに大折伏戦を展開した。敗戦によつて、塗炭の苦しみにあえていた人々に布教するには、罰論を説くより「信心すれば幸福になる」という利益論のほうが時宜に適っていたからだ。戸田氏は、本尊を幸福に導く手段として捉え、「幸福製造機」とまで譬えた。本尊の流布＝広宣流布であった。かくして、全国各地で猛烈な「折伏大行進」（戸田氏）が繰り広げられたが、その強引な方法・手段ゆえにまたトラブルも続出し、退転者が絶えなかつた。教育学会時代と同じである。

戸田氏はまた、教育学会時代と同様、通信添削（日本正学館）、出版（日本正学館、日正書房、大道書院、

大衆社など）、金融（東京建設信用組合、大蔵商事）などにも手を染めたが、当初こそ順調だったものの、悪化するインフレ経済の波に飲まれ、ことごとく破綻を来した。しかし、この事業は、会長就任後、優遇税制の特典を受けられる宗教法人を取得することによって今度は会員を「顧客」とした収益事業（機関紙や出版物など）へと転化され、成功した。しかも、これらの事業は、戸田氏の苦境を公私にわたって支えた第三代会長・池田大作氏（現名誉会長）の手で拡張され、新聞、出版、広告、映像、墓苑、建設、不動産事業、学校法人経営等々、いまや創価学会コンツエルンともいうべき巨大な事業体へと成長している。僧侶吊し上げについても、戦後も相変わらず、いわゆる狸祭事件をはじめ、近年の52年路線問題に至るまで、創価学会の意に沿わない僧侶を集団で難詰・威嚇して、宗門に圧力をかけるのを常套手段とした。

こうして見ると、戦後の創価学会の原型がその前身の創価教育学会にあることが理解できよう。

第二部では、戦時中の牧口会長、戸田理事長の信仰観、時局認識、人柄等について回想し、牧口会長を「ヒトラー、ムッソリーニを英雄としてほめあげ、東條を加えて、世界の三羽鳥と賞賛し、日本を東亜解放の救世主と誇り、大東亜戦争をもつて広宣流布の前提と見なした」、戦時国家体制に随従する通俗な思想家であったと看破している。これを裏付けるように、教育学会総会では日本軍の戦果を誇り、教育学会の一層の奮起・精進を鼓舞している。

「大東亜戦開始以来の戦果は、法華経の護持国なればこそであります。昨夜のラヂオ放送の如き余裕下に、今日総会を開くのは感激の極みであります」（「大善生活実証録」第四回総会報告開会の辞）

「大東亜戦争も一周年の垂んとして、陛下の御稜威の下、我が陸海軍将兵が緒戦以来、赫々たる戦果を挙げてゐる事は、吾等の衷心より感激に堪えない次第であるが……」（「大善生活実証録」第五回総会報告開会の辞）

それでは、なぜ教育学会が官憲によって弾圧されることになったかといえは、教育学会の過激な折伏が、当局には思想紊乱と映ったからである。

「予てより警視庁、福岡県特高課に於て内偵中の処、牧口会長は信奉者に対し、『天皇も凡夫だ』『克く忠になどとは天皇自ら言はるべきものではない。教育勅語から削除すべきだ』『法華経、日蓮を誹謗すれば必ず罰が当る』『伊勢神宮など拝む要はない』等不逞教説を流布せるのみならず……」（「特高月報」昭和十八年七月分）

と記されているとおり、国家神道Ⅱ天皇現人神説によつて思想統一を図り、戦争遂行を容易ならしめんと目論む当局にとつて、牧口氏らの突出した言動は世間を騒擾させる反体制思想の萌芽と見なされたのである。教育学会幹部の一斉検挙が始まったのは昭和十八年半ばからであるが、この頃になると、日本軍は開戦当初の破竹の勢いとは裏腹に、ミッドウェイ海戦の壊滅的打撃に見られるように、連合国の反転攻勢によつて戦局が悪化し、物資も不足し始め、国民生活も不安定になっていた。そこで当局は社会、経済、文化、思想、宗教などあらゆる面で統制を強化し始めたのだが（日蓮門下関係でも、御本尊御遺文削除問題、宗派合同問題等の難題が突き付けられていた）、中でも社会不安を助長するのを恐れ、言論統制には神経質になっていた。教育学会ばかりでなく、あらゆる階層で国家に批判的な言動を弄する個人、集団、団体が取締りの対象とされ、続々と検挙された（「昭和特高弾圧史」全八巻「太平出版社刊」に詳しい）。

しかし、前述したように、牧口会長らには、戦争に反対し、国家統制に抵抗するという意識はなかった。あくまで、天皇以下が日蓮正宗の信仰に帰依し、国を善導することによつて戦勝に導き、「大東亜」に広宣流布の礎を築くこと——それが、牧口氏らの創価教育学会が国家諫曉を企図し、過激な折伏戦を展開した所以であった。

「牧田城三郎（注Ⅱ牧口常三郎のこと）先生は国家諫曉を思い立たれ、自分は学会幹部を集めて、救国の一大折伏戦や支那大陸への潜行運動などを展開しようとしたが、それは飽く迄も、日本を負けさせたくないからであつて」（妙悟空「人間革命」）

と戦後、戸田氏も述懐しているとおりである。

その戸田氏について著者は、出獄後、創価学会の再建に着手していた戸田氏が教育学会時代の破天荒な言動、野放図な振舞いからいかに脱却したかを憂え、創価学会の前途に一抹の不安を抱いていた心境が吐露されている。

著者はまた、戦時下の日蓮正宗管長・日恭上人が牧口会長を「日蓮の再誕」と激賞していた事実など、驚くべき証言を披瀝している。神札の取り扱いや国家諷諭問題で一時、宗門と教育学会は険悪な状態に陥ったが、基本的に本山は牧口会長らの活動を高く評価していたことが窺われる。

その意味で、本稿の公表は、戦前の宗門・学会の關係史を再検討することにもなるであろう。

本稿のコピーはこれまでに、おそらく複数のルートで流出していると考えられるが、どういうわけか、今まで全面公表された形跡がない。しかし、ここに明らかにされている創価教育学会のありよう、即ち牧口会長、戸田理事長の実像は、およそ現在喧伝されているところの、「反戦思想家・牧口常三郎」「偉大な宗教家・戸田城聖」とはまるで異なっており、他の教育学会関係者の証言や記録の出現が今後とも期待できない以上、ぜひとも活字化し、創価教育学会に関する貴重な記録として後世に残すべきだと判断したいである。

本稿の公表が、いまだ闇に蔽われている創価教育学会の実像の解明にいくらかでも役立てれば幸いである。創価教育学会幹部の手記としては、すでに副理事長の要職にあつた野島辰次氏の遺稿集「我が心の遍歴」(平成4年、私家版)が刊行されているが、野島氏の手記はその題名どおり、あくまで自分自身の信仰の遍歴をつづつたものであり、創価教育学会そのものを客観的に分析し描写したものではないところが本稿と基本的に異なっている。なぜかといえば、野島氏が投獄直前まで教育学会の最高幹部の一人であり、福田氏の遺稿を読めばわかるように、出版クラブの例会において一方の福田氏を批評する立場にあつたからだ。したがって、野島氏の視界には福田氏は記憶されるべき存在として入っていかなかったが、批評された福田氏の視界には他の幹部ともども野島氏の存在はくつきりと捉えられていた。ここに、創価教育学会を見る尺度の違いが発生する(それは、とくに牧口会長に対する評価において顕著である)。

しかし、一点共通項があった。それは、戸田城聖氏に対する評価においてほとんど一致していることである。いや、むしろ同じ最高幹部として間近に接していた分、野島氏のほうが戸田氏に対しては遙かに辛辣だ。「…そのために遠田（*戸田氏のこと）は勝手気ままに振舞いそれはまるで傍若無人といった一種のファツシヨでまるで倶楽部（*「生活革新同盟倶楽部」のこと）では親分気取りであつたし、学会の中も金融などのことでいいように掻き回していたし、その揚句の大酒呑みと女狂いだった」

野島氏が戦後の創価学会に距離を置いたのは、獄中生活を通して教育学会の活動を冷静に振り返る時間が持てたことからだった。特に最大の疑問として同氏の脳裏に浮かんできたのは、なぜ教育学会があのような弾圧を受けなければならなかつたのか、ということだった。現在の創価学会の公式見解では、「国家諫曉をおこなつたゆえの法難」という捉え方にされているが、野島氏（そして福田氏も）はそうではなかつた。「信仰利用の詐欺団体」と当局から生まれ、いわれなき弾圧を受けたというのが野島氏の心証だった。

戦後、戸田氏と相対して、教育学会の総括をした際、野島氏が、

「つまりは学会の在り方が非常に間違つていたんだと思いますね、警察のものや検事なんかからもさんざんにそういわれたんだが、まるで学会は宗教とか信仰とかいうものを利用していた詐欺団体のように思われていたようですがね」（「我が心の遍歴」²³⁶頁）

と核心をついた質問をしたのに対し、戸田氏は「全くその通り」（同）と否定しなかつた。

さらにまた、戦後、学会を再建しようとして奔走していた戸田氏の動静を間接的に耳にして、戸田氏の素顔に失望したからだった。つまり、相変わらずの大酒飲みと相変わらずの愛人の存在であった。

こうして、野島氏も福田氏同様、戦後は創価学会には参加せず、寺院檀徒である法華講に所属して信仰活動を続けて生涯を終えた。

なお、福田氏の証言を補強する意味で、「註」の中で野島氏の遺稿からも若干引用させていた。だいた。

凡 例

一、本稿の原題は「私の小説」と記されているが、内容が事実を吐露した手記であるため、編者の判断で「創価教育学会の回想」と直截的なタイトルに改め、さらにわかりやすく「私が接した牧口会長・戸田理事長の実像」という副題も付けた。

一、第2部に当たる「牧口会長の学説について」は、原稿では無題であったが、これも編者の判断で任意にタイトルを付けた。

一、原文は旧漢字、旧かなづかいだが、新字体、現代かなづかいに改めた。

一、本稿中に取り上げられている人物や事項について、註を設け、理解しやすくした。

一、読みやすくするため、適宜改行したり、句点を補ったりした。また、明らかな誤りは訂正した。

(例)板垣正四郎↓中垣豊四郎)

入信から退会まで

この一編は私の信仰の記録である。わかりよく言えば私の my faith Document である。

西川喜右衛門とは既に昭和十年からの取引であり、その次はもはや友達であつた。彼は印刷屋であつた。神田小川町に秀英社という工場を持ち、経営なお日深からぬ、いわゆる町工場として第四、五流どころでも言おうか、事業欲に満々たる熱情と理想とを持つ人間の常として、腕と意気とを資本として印刷界に飛び込んだ彼は、ご多聞にもれず悪戦苦闘、その資金に追われていた。それは私の出版屋の姿とそっくりであつた。

或る日、その工場で戸田城外なる人を西川から紹介された。その時この信仰の話を開かされたのが、当家の信仰というものを私が知つた最初である。

へえ、そんな信仰がこの日本にもあるのかな、と私は思った。

もともと私は、出版に於て自分の理想に、みごと惨敗を喫し、無智でありながら、やたらに不逞な妻と離別し、借金の山に押し流されては、やけくそに赤い酒を飲み歩き、それにも哀愁をおぼえて、今の妻を娶り、本来の自分の姿に立返つて、業態はほそぼそながら、まず借金によらぬ營業を確立して、心身の浄らかな人生を送りたいと、たまたま知人の話から伏見稲荷のおミタマというのを受けて、朝な夕なに、その神棚に向つて端座しては柏手を打つて祝詞六巻をあげていた私であつた。

そんな観念的な信仰が君、何になる、と戸田氏は言う。——信仰である以上、その日その日、人生に實際の利益りやくがなくてはならない。この信仰をやつてみたまえ、目に見えて生活が變つてくる。第一、きつと奥さんが丈夫になる、と戸田氏は言つた。

實際の利益？ それが私には氣に入らなかつた。なぜなら私の信仰理念は、あくまでも精神主義であつて、

實際の利益というものは、それ自体が信仰の目的とすべきものではなく、信仰の至れるや否やによつて必然的に結果すべき性質のものだったからである。

しかし「奥さんが丈夫になる」、これは私には何よりうれしかった。なぜなら丈夫であつた筈の妻は、いつか持病の喘息が目ざめ、時どき発作を起して苦しんでいたからである。

その話をする、戸田氏はそれは大変だ。ほつとくと君、奥さん死んじゃうよ、とも極ママした。

今にも、これでおしまいか、と思わせるほど苦しむ妻を見ていた私は、これほど近代科学の発達した今日に於てすら尚かつ、この喘息という病いには医者もなければ薬もなく、ただモヒ剤の強烈な注射によつて一時の発作をとどめ、あとは自然療養に俟まつより外に手のない医学であつたから、ともかく、その信仰というのをやってみよう、どうせやるなら一日も早い方がいい、という考えが起きた。

それでもまだ私には狭く逡巡する気持があつたと見えて、折柄そこへ生活の苦境をうった懇えて来た取引先の店員にその話をする、それでは連れて行つてくれるということになって戸田氏に連絡して、その時間を待たところ、なかなか来ない。先方のお寺でも待っているということではあるし、戸田氏も忙しい時間をくり合せていることではあるし、それもお気の毒なことと思ひ、どつちみち自分も行くことになるのだからと、それではその代りに僕を連れて行つてもらいましょう、ということになつて、そのまま——仕事着のまま、ジャンパーに草履をつっかけたまま、それでいい、それでいい、と戸田氏に促され、西川君の工場から車に乗せられて連れて行かれたのが砂町教会(1)であつた。

なぜ私とその初めに逡巡していたかと言えば、実は戸田氏は、私の方ではその時が初対面ではなかつたのである。よほど前に、やはり西川君の工場で校正をしていた時、何か大きな声で、やあ、やあ、とはいつて来たと思うと、和服姿で袴をはいて、ぼさんと無造作に髪の毛をたらし、めがねをかけた妙な目つきをした大男が、西川のあとから、ずかずかと二階にあがつてしまったのを、暴力団の一人かな、いやに不作法な男もあるものだなあと思つて見ていたことがあつた。それが戸田氏だったからである。

砂町の教会へはいると、これはまた何ときたならしい貧弱なお寺であろうか。狭い本堂らしい突当りには、なるほどお寺らしい金ピカの仏前がある。しかし電灯はうす暗く、至ってみすばらしい感じであった。わが身をふり返つて、これなら却つてふさわしいという氣持でさえあった。

御僧侶という御主人と挨拶をする。その母堂と奥さんがいらつしやつたが、その三人きりで、一人の小僧さんもない。

ところが、戸田氏の紹介された御僧侶というのは、まるでハキダメへ下りた鶴の如く、何と端麗な、その目から顔立から、その顔色といい、かつて見たことのない、文字通り名僧智識型のお若いお坊さんであった。では、と言うので仏前にすわらせられ、長々の読経があつて、さんざんお題目がつづいて授戒というものを受けた。お経というものを、これほどしみじみと聞いたことはない。長々とした何やらわからぬお経ではあるが、どこかで聞いたことのあるような音が時どき耳にはいり、そのリズムが、すばらしい音楽的な大叙事詩のような感じを受ける。

何とか言つて、先生は最後に、信じ奉るや否や、信じ奉るべし、と言う。そう言われている自分のうつむいた頭の上には、何か金らんどんに包まれた一巻の巻物みたいなものが軽くふれられている。こんなに長く端座したことの足はしびれてお経中にもじもじしていた私であつたのに、その時になると、それもふしぎに苦にならなくなつて、どこか頭の中が、全身がすつきりと浄められたような清らかな氣分であつた。

終つて、有難うございました、とみなさんに言う戸田氏は、おめでとう、と言われた。このおめでとう、はその時の私には妙な言葉にひびいたが、あとで考えると、この入信の式というのは、簡素ながら莊重で、たしかに、おめでとう、の言葉に該当するような氣がした。なんとなくこの式をくぐつた自分はそれだけでも幸福な氣がして、帰ると早速、家内にその話をした。

帰りには、また戸田氏が表に待たせておいた車で、初めての夜道を走り、拙宅まで送つてくれ、頂いた御

本尊というものを、俄か仏前を適当な場所にしつらえて、そこにかかげて、これから朝に夕にこのお経をあげ、お題目をとなえて、お勤めというものをするのだ、ということになって、それにはまず謗法ばらいと言って、この伏見の稲荷さまを取払わねばならぬということになった。これは私には大変なことだったが、この信仰を徹底せしむるためには必須の前提条件とあらば、もはや致し方がない。しぶしぶながらも、真新しいサラシを家内に取出させて、それに包み、明日それを京都の伏見稲荷本社へ送り返すことにして用意が出来ると、戸田氏は大声で先前の教会通りのお経を朗々と読みあげ、——と言つてもそらんじてあげて大音聞こえよとばかりお題目をあげた。私の店は向う三間両隣りに接した九尺二間の長屋であれば、どんなに隣り近所が驚いたろう。私はきまりがわるくて、その大音声にひやひやしていた。

私たちもお教会で頂いて来た一冊の経本をひろげて、戸田氏の声についていたが、何が何やらむずかしくてわかつた。ただそのルビだけを拾っていた。

戸田氏は言った。信仰は俗にも一年三年七年と言つて、その通り一日、三日、七日と違つてくる、と。

なるほどね、そういうものかと思つたが、ただ、お忙しい中を、多分の時間を自分たちのためにさいて下され、おまけに往復二時間あまりも車の費用をかせさせた戸田氏に恐縮して、その礼をのべて別れたが、教会で入信の式がすんでお茶をいただいた時、先生が、信仰は火の信仰でなくて水の信仰でなくてはいけない、という意味のことを言われたのが妙に耳に残つていて思い出されて仕方がなかつた。

思えば、その時の戸田氏は、どんなにいい心持で帰られたことだろう。神田に於て入信したのは西川の外、一週間前、兄貴の橘篤郎に次いで、多分私が二人目の筈である。そして教会の入信帳によると、それは三月十日であつた。

それまで祝詞をあげたことのなかつた妻が、今度は積極的で、お経をあげ始めた。ひつかえ、おつかえ、二人でルビを辿り辿り、まどろこしくつて、じれったくつて仕方がなかつた。それでも家内が何とか早くおぼえたいという一心でお経本と首つ引きであげていると、この忙しいのに、いい加減にしろよ、こんな長た

らしい、むずかしいお経を五日や十日でおぼえようたつて無理だ。それよりさっさと飯にしろ、などとおこつて、おあがりくらいでご免を蒙る日も少なくなはなかつた。

しかしお初のお水と御飯、それに生ぐさでない物を買えば、水菓子はじめ何でも供えてから頂くという風に決して御本尊をお粗末にするということのないのは感心だつた。そして妻が授戒を受け、その月末には戸田氏にお供して、当宗の総本山たる大石寺へ初詣をした。

水兵帰りの佐藤君という文学青年が訪ねて来て、秀英社で働くことになつて信仰について話していると、戸田氏が目白に、こういうえらい先生がいるから、お話を聞いて来るといい、と佐藤君に言うので、それはいい、一緒に行こうということになつたが、私は何かの用事で行かれなかつた。行つて来た佐藤君に、どうだつたときくと、いいお話もあつたが、何だかむずかしくて、私にはよくわからんということであつた。

それから幾日かたつて、佐藤君を案内にお訪ねしたのが牧口先生であつた。

不自惜身命とか、大火所焼時我此土安穩とか、お経本についてのお話が出たり、依法不依人だとか、多宝如来だとか、かつてものの本で読んだこともない文句を聞かされ、その意味を説かれ、大へん面白く有益であつた。

外国文学と哲学の片鱗にふれ、従つて宗教と言へばキリスト教の一面だけを覗いて来たにすぎない私には、先生の話が非常に興味深く引かれるものがあつて、出来るだけ時間をつくつては、先生の在宅時間を狙つて、ちよくちよく目白へ出かけた。正・像・末の話、十界互具の話、一念三千の法門と、そのたびに何う話は、遂に私にとつて非常な魅力となつて私を捉えた。自分の心のどこかの隅で多年あこがれていながら、ついでその機会を得ずにいた私の仏教への関心は俄かに花ほころび始めた如く歓喜にふるえる思いで、仏教への研究心が目ざめていった。

仏教！ 宇宙の核心をつかんだ世界最古最大の大聖典！ 三千年の昔より巖として万世不易、一字一句だをも付加を許さず、削除を認めず、些の修正も加うる能わず、この科学現代に、古くして而も日々あらたな

る人生及び社会に汲めどもつきぬ生命の息吹を送り、良薬を送る大仏教哲学の深遠幽邃なる構想とその表現が、そこはかたなく偲ばれる気がしてきて、朝夕のお勤めの読経がたのしくなるにつれ、福重照平先生あらわすところの「法華経入門」(2)その他を知つて、自我偈の解釈がおぼろげながらわかつてくるに従つて、私はますますこの経文に驚異を感じた。なんとという素ばらしい叙事詩だろう。天人常充滿、園林諸堂閣、種種宝莊嚴、宝樹多華果、衆生所遊樂……に至つては、ただただ拝跪讚歎のほかはない。読経しつつ、そこへ来ると、私の目の前には今でも必ず法隆寺の壁画、平等院の壁画が浮びいでて、思わず、御本尊に頭がさがるのである。

その御本尊とは何か、宗祖大聖人、末期に至つて初めて種脱され、わが魂を墨に書き流し、と仰せになつた、白法湮滅、大白法出現の、一閻浮提の大御本尊、観心文底秘沈の人法一箇独一本門戒壇の大御本尊の嫡流なる御本尊であることは説かれたが、今もつて私には、やはりただ五字七字の一つの曼陀羅としか映つてこないが、こと苟くも信仰いやしである以上、身をもつての信仰なればこそ、そこには何らかの形に於て対象としての当体がなければならぬ。その当体としての御本尊である。私にはそれでよいのである。それが大御本尊と共に生けるが如く、さりとして依然として五字七字の曼陀羅にとどまるけれど、私には何とはなしに畏れ多い有難味が映つて来る。それ故に端座して頭をさげ、お勤めをする。いや、せざるを得なくなる。このせざるを得なくならしめるのが御本尊の御威光とでも言うのであろう。私はそれでよいのだと思つている。自分の信仰のあり方というものを尋ねれば、それが信仰のすがたであらうと考える。

牧口先生に会うごとに戸田氏に話すと、それはよかつた、それはよかつた、と言つてくれては、私が御観念文の黙禱の致し方や、お題目の回数や、お鈴りんの鳴らし方など、こまごまと具体的なことを尋ねると、そういうことはお坊さんによくきいてくれと戸田氏は答える。それで私は、つまらぬことのようにだが、人生の第一歩に崩れつまずいた私は、学問にしても第一歩の基礎学が最も大切だと、いつも語学の勉強にそれを思うにつけ、わざわざ砂町へ出かける。お茶を頂いて、その他何か人生について、生活についてお尋ねする。

しかし千種先生(3)は、牧口先生のように決して、こまごまと語られないで、帰り途に何度考えても解しかねるようなことを、しかし伺った時にはわかったつもりでいるようなことを、ぼつりぼつりと言われる。帰つて来てもわからないから、また秀英社へ出かけては戸田氏にその意味をただす。

どういうわけか、そのころ戸田氏は毎日、一度は必ず秀英社へ来ていたから、私は甚だ有難かつた。戸田氏は、きつと西川君の共同出資者だろうくらいに考えていた。そういうことは私には、どうでもよかつたのである。

戸田氏は、それは恐らくこういう意味だろう、と言う。私は今度はわかつたような気がして喜ぶ。すると戸田氏は言う。福田君、それだけうれいと思ふ信仰を、ただ自分一人だけで喜び有難がつていてはいけない。それはちやうど、自分だけがうまい物を食つて、親子、兄弟、女房誰にも食わせないということと同じだ、と。

なるほどそうだと私は思う。

だから、この信仰は人にも食べさせなければ罰があたる、と戸田氏は言う。

たしかにその筈だ、人間だもの、と私は思う。その、人にこの信仰を食べさせるといふことが、教化、食わず嫌いで、匂いすらかぎたくないような人に何とかして匂いをかがせ、遂に食べさせてみるのが折伏といふのだということをおぼえた。

よし、それならとばかりに、私はその教化、折伏を始めた。

まず、これはなかなか牢固として抜きがたい邪宗に深入りしていると思つた製本屋の竜野君が、たちま忽ちすつぱりと二十年の善光寺詣りを棄てて砂町へ行つた。続いて子供の時分から友達である油絵かきの小堀が行つた。家内の兄が行く。私は教会通いと御本尊送りが忙しくなつた。

目白へ行くと、驚くことには、それを先生が、昨日のことだのに、どうしてだか知つていて、大変に喜び、ほめる。私は擦すくつたくてしかたがなかつた。べつに先生に喜ばれ、ほめられることをしたと思つてはいなかつ

たのだから。ましてほめられよう、喜ばれたい、などとは夢にも思っていないかったのだから。ただ自分のおすそ分けとしか思っていないかったのだから。しかしこのおすそ分けは人生にとつて容易ならぬおすそ分けであるが故に、それだけは単に物や金をおすそ分けしたのちがつて、何か大きな喜びが私に湧いた。それでは十分に自分の労が酬いられているのであつた。

孝にも三種あり、上品、中品、下品と言つて、云々と、目白へ行くと、そのたびに何か新しい初耳なことをおぼえる。そして新顔の人に会う。異体同心だという。寺坂君を知る。先生のお弟子で小学校の先生をしているということであつた。なかなか理知的な顔をしていて、何かひとこと言うにも、一言一句をもおろそかにしないといった慎重な構えの人で、話を聞いていると、いかにも理路整然として、しつかりしている。いい人と知り合つた、と喜ぶ。

そこへゆくと、どうも戸田君は酒ばかり飲んでいて駄目なんだ、と先生が言われる。

そう言われてみると、どうもどこか戸田氏は莫としたところがある。気がつく、不思議なことに、西川君の工場には肝心な御本尊もなければ、彼がそれまでに一度も私にこの信仰の話をしたこともない。ましてお寺へ行つたらしい様子もないので、西川君はまだ入信していないのだな、と思つてみると、そこへ応召が来て、歓送会ということになると、やっぱり入信者だということがわかつた。そうすると、信仰上、戸田氏とのつながりが不明瞭であつた。

なんとなく牧口門下には、この戸田氏流と、寺坂流と二つの型と行方があり(4)、それが対立的に見え始めた。私がそれを言つと、そんなバカなことがあるものか、と戸田氏が寺坂君との信仰上の關係を話してくれた。その結論では、たしかにそんなバカなことのないのは頷けたが、私の見た目には間違いがなかつた。わざわざ北海道へ行つていた寺坂君の所まで戸田氏が出かけて、自分の怨疾を詫びたことがあるという。それが今はこうだと聞くと、何か精進の仕方に鎬しのぎを削つた風な跡が偲ばれて、奥床しく、その感じが残つているのだと思われた。

その年の秋には麻布の菊水という料亭の二階の大広間で、たしか十七人かの会合で、ガランとした中に千種先生に御臨席を願つて、なごやかな信仰の会が催され、記念撮影までしたことがある。これが創価教育学会の初の会であつた。それがその翌年には、その二階の大広間がいっぱいになるほど会員がふえた。わずか一年で隔世の感があつた。出版屋の広田義史、森谷均両君がこの信仰に御縁を結ばれたのもその時であつた。竜野君に、まずその空気を見に来給え、と誘われて来たわけであつた。広田君は同業で知つていたが、森谷君は初対面であつた。私はその屋号すら聞いたことのない人であつたが、いずれも竜野君に製本をやらせている関係だということであつた。

なぜ竜野君の勧誘で両君が、わざわざ忙しい中を来たかと言えば、この信仰に対する関心は勿論のこと、これは私の推量であるが、私に会つて一度戸田氏に会いたい希望があつたためらしい。少なくとも広田君はそうであつたようだ。というのは、それより以前、西川君が出征に際し私と橘君のことを、よろしく頼むと戸田氏に言い置いて行つたとかで、戸田氏が或る日、私に、もし仕事をするに資金が必要なら、沢山も融通は出来ないが、いつでもするから遠慮なく言いたまえ、と言つて下されたことがあり、橘君は渡りに舟とすぐに融通を受けたそうであつたが、その当時、私にはその必要がなかつたので、では、いずれ一つのまとまつた企画でも立てたらお願いしますと言いはしたものの、出版屋のことだから、やりたい仕事は山ほどある、親舟に乗つたつもりで私は思い切つた企画に着手して戸田氏から、その資金として金二千円也の融通を受けたのが戸田氏との金融関係の発端であつた。

そのおかげで、わが六芸社は、再びばツと返り咲きをしたように同業間の目には映つた。ことに竜野君には二百円だか三百円だかの支払いを丸二年も待つてもらつたことのある私が、そして月々たかのしれた仕事しか出来なかつた六芸社が、どしどし仕事をよこす、支払いは、きちんとくれる、まことに景気がよい、それは何のためか、この信仰についたために戸田城外という同信の大先輩の先生がパトロンになつたらだ、という宣伝がきいたためであつた。

しかし私と橘君とに手をやきかけていた戸田氏は、異体同心にはなっても、もうおいそれとそういう話には乗ってくれなかった。それでも、もともと兄弟分の如き橘君の口添えもあつて広田君は融通を受け、私の保証という事で、森谷君も銀行取引に入用程度の金融を受けることになった。横道ながら森谷君の出版業者としての出発は、この時が振出しだったのである。

ところが出版事業に二万三万の金は瞬く間で財産としてはふえても実際には、いつも資金難に喘ぐのが群小出版屋の常道である。いずれも出版には各自の理想とその夢が不可分離だからである。分けても理想主義型の私ではたまらない、次から次と理想を追う企画に進むから、ますます深入りして最初の二千元が忽ち二万円になる。自分でも考えざるを得ない。さすがの戸田氏も考える。

しかしここまで来れば戸田氏も仏つくつて魂いれずに終らせたくないばかりに、のつびきならなくなる。私もまた、どんなに迷惑をかけても、ここを乗りきつて、おかげさまで、と言える六芸社にしなければ、折角これまでに面倒みてくれた戸田氏に相済まぬ、こんな不甲斐ない私をすら戸田氏に見出させて下された御本尊に相済まぬという気がして、忸怩たる私を何となく揮い立たせるものが湧いて、私は勇敢になる。

戸田氏は稲葉氏と相談する。信仰には全く棄てがたい君が事業にはどうしてこうだろうと稲葉氏もつくづく首をかしげる。そうなると牧口先生の私に対する見方が変わってくる。私は賞賛の福田が一朝にして批評の対象、非難の的でしかなかった。

その頃は、もう学会も一つの組織体になつて、四谷からは同業野島辰次君という錚々たる暁将が現われ、戸田氏も金融業務を商手株式会社と発展せしめ、目黒より神田に移し、稲葉老をしてその事務にあたらしめ、学会もそこに本部を置くことになり、その年から大会を春秋二回として、菊水では所詮収容しきれぬため、なんと千鳥ヶ淵の教育会館へ進出という盛大さになつた。

先生の令息陽三、渡辺力両君や稲葉父子をはじめ、その昔、赤の運動をして理論闘争で牧口先生の軍門に下り、法華経に生き返つて先生の庇護により小学校に奉職中という矢島周平、木下鹿次、寺坂兄弟、中垣豊

四郎、陣野、神尾諸君、新しいところで、戸田氏の少年時代からの親友という本間直四郎、金融の鬼才の如き岩崎洋三、応召帰りの西川喜右衛門、若いところで、もと中島飛行機にいた片山尊、暫く岩崎君の事務所に通っていた野田忠志などという一騎当千の勇士が現われて、学会はまさに昇天旭日の感を呈した。

一方には、出版界の古老北村宇之松、奥川栄諸君が入信し、本部には商手倶楽部というものが出来て、互いに信仰の道に励み合いつつ、各々の事業、営業の発展策を講じてゆくという機構であった。出版屋八社九人のほか金子、藤森富作、富田武夫、林辰夫、鈴木長太郎、金子、吉原省三、昭和銀行支店長の曾根繁、無尽会社重役何某等々、いずれも一癖も二癖もあり、人生の荒波を泳ぎつつある一國一城の主ばかり三十何人かの倶楽部があった。その中にまた出版ブロック(5)というのが、野島、広田、橘、四海書房の四海民蔵、吉田春義、福田、森谷、北村、奥川、それに戸田氏が陣頭指揮者となつて同様な目的をもつて組織された。従つて本部をはじめ、あつちでも、こつちでも先生が回りきれないほど座談会というものが催されて、それは月々のスケジュールによつて発表され、実験証明座談会と名づけられた。

その座談会ごとに私は指摘、非難の的であつた(6)。足が痛くなるから胡座あぐらをかくと、それが既に不謹慎な証拠だと叱られる。どうしてこれがわからないのか、それは剛情だからだ、剛情とは自我が強い証拠だと突込まれる。なぜ翻然とそこを悟つて懺悔滅罪しないのかとヤツつけられる。ドストエフスキーの「罪と罰」でラスコリニコフは地に額をすりつけて懺悔に号泣しているじゃないか、と西川喜右衛門が説く。はては、なんてふてぶてしい野郎だろう、と吉原が毒づく。最後に、この人は到底だめだ、と先生が駄目押しをする。その間、竜野君はじめ誰一人として助け舟を出してくれる者はなく、それどころか満座の視線は憎々しげに集中されている。

何が諸君をして私についてかくの如き言動にいでしめるのか。それを思うと私は我ながら、ぞつとする。その根本の原因は、既に五十万円という借金の山を背負つたことにある。巧みに信仰を利用してそこまで人に迷惑をかけて、恬てんとして恥じることなく、臆面もなく、よくもこの娑婆世界に、のうのうとしていやがる、

ということにあるらしい。いたずらに借金はすまじ、誰が仇やおろそかで、ここまでの借金をするものか、私がそれを幸いに株をはったわけでもなし、女狂いをしたでもなし、それほど飲みつづしたわけでもなし、それは誰でも認めているらしいが、それならそれで面白いのだが、とさえ言う人がある。

私は、尊者の如く舌をかねて死にたかつた。とんだ泥沼へ足を突込んでしまったものだと思つた。もはや創価教育学会とは、私にとつて蜘蛛の巣の如き感すらなかつた。借金と共にものがけばもがくほど蜘蛛の餌食になりゆくような心持だつた。しかし、じつとしていても金利は二十四時間たちさえすれば何千円かふえる。それこそ恐るべき天文学的数字である。金輪際、孫子の代まで——と言つたつて、私には幸いにして、一人の子供もないが——永久に借金はしまい、やはりまた再起の出發をあやまつた、何という俺は宿命を負つてゐる男だろうと、ほろほろ涕が頬をつたわるけれど、この現実をどうするかだ、この五十万という大借金をどうするかだ、と思うと、むしろ死を選びたかつた。

そうだ、俺はこの舌一枚で何十人かの人々を折伏したのだ。だから何十枚かの舌で今その自分がやつつけられ、さいなまれるのは当然の酬いだ、と考へてみる。まことに味気ない、侘しい生活であつた。この信仰を棄てさえすれば、この桎梏から逃れられる。幾たびそれを思つたかもしれない。しかし、これは与えられた俺の試練なのだ、煉獄の苦しみにも耐えぬいた人さえある。この信仰とは果してどういふものか生涯をかけてみなければわからぬ。生涯かけてもわからないかもしれないとしても行けるとこまで行つてみないうちに棄てるとは卑怯だ。卑怯なばかりか虻蜂とらずに終わる。そうなれば自分の教化したAもBもCも、XYZ諸君も果して自分で自分の道を発見してゆくかどうか疑問である。それほどの責任をどうするか。戸田氏の言う如く、たとえ百万といえども御本尊の目よりすれば恐らく木の葉も同じかも知れない。してみれば、もし時機さえ至れば、この五十万といえども、かさぶたの、しらずしらずにはがれるが如くなくなる時がないとも限らない。やはり信仰だ、こうなれば、あとはただこの信仰あるのみだ、どこまでもかじりついてゆく、という心持になつて、火の信仰より水の信仰、と最初に言われた千種先生の言葉が思い出され、何十回

か登山したお山の大本尊と戒壇と、お山の風光が臉に浮んでは、夢遊病者の如く、ふらふらと砂町へ足がひかれてゆく。

或る年の秋の学会総会は約二千人から集まった。その満座の中で劈頭へきとう、陣野君の細君から、おつちよこちよい、と罵られた。その場合、何故に私が、おつちよこちよい、と言われるに値打していたかと言えば、その数日前、陣野洗濯店で座談会のあつた折、その細君から洗濯物の仕上げ品を包む紙は何かないかと尋ねられ、探してみようと別れたことがある。それほど急いでいるとも思わなかつたし、常日頃、陣野会社というのは帝室御用達だと、同じ洗濯業でも別格だと宣伝されていたので、へたな紙でも困るだろうと物色していたところへ、その一言で、福田は引受けておきなが無責任だ、軽率だ、だから、おつちよこちよいなのだ、という結論に至つたものである。

私は啞然として目をぱちぱちさせていた。万雷の拍手であつた。そのあとで戸田氏は細君をほめた。勇敢になつた、その意気で進め、と。

歳も歳、しかも出ないわけにゆかない商手の会合のたびごとに、やつつけられぬいていた私だから今更誰に何と言われようと、別にこれという感じもなく、何かふたこと、みこと答えただけで、細君の方は黄色い声をはりあげて、いきりたつていたけれど、私は取合わなかつた。なんて手前勝手な女だろう、あんな女房を持つた亭主こそ禍いなる哉、桑原桑原と思つたことであつた。

その後、麻布の料亭菊水で奥川君が数人の仲間から殴られたという事件があつた。次の座談会では、その暴行はみんなの憎しみの総意だ、という戸田氏の解釈で、先生から何らの修正もなく、それにしても、ひどすぎる、と言いかけた奥川君の言も消されてしまった。

私も列席していた出版ブロックの会であつたが、ひと足先へ歸つたので知らなかつた。菊水へは何の会、かんの会と呼び出される。それが私には苦痛であつた。何故なら酒が回ると戸田氏のお談義である。頭領ぶつた悪罵、怒罵である、酔いの上とは言え、頭から、この土百姓ども、と来る。どつちが土百姓だかわからな

いが、そうなると、芸者はこそそ一人へり二人へり、廊下などでコンパクトを出して鼻の白粉おしろいを直しながら、今夜はまたフーさんの番よ、などとひそひそ女中と話し合っている。フーさんとは福さん、即ち福田さんの番なのである。

夏ともなると、ふんどし褌一本まっぴだかになり、金物に入れた懐中御本尊につけた黒い細紐を色白の肌にかけたまま大あぐらをかいて扇風機に吹かれながら茶碗でガブガブ飲みながら始まる。どうかすると、稲葉老にそういう怒罵が回ることがある。何か家庭問題をめぐる懸案が爆発するらしく、恭々しく頭をさげて承っている稲葉老も時どきは奥川栄を、まっぴだかになって怒つたのを私は見たことがあった。エノケンみたいな赤裸の老を私はなだめたこともある。私は二次会で、吉田春義君に首をしめつけられたこともある。鈴木長太郎と吉原省三に、うしろから首をしめられたこともある。土百姓！の前は「同志」である。倶楽部会ともなると、大変な騒ぎである。それがいやでたまらないから、私は必ず潮時を見計らって失礼するのが常であった。

菊水を根城として月々車代何千円、飲み代何万円という戸田氏だから、いつ行っても、そのご威光たるや大変である。それが誰かの関係で下谷、湯島と転出し始めた。と言っても、その帰りにはまた菊水または何の屋である。

だから座談会も五時となると、では約束がありますから先生失礼します。諸君お先へ、で戸田氏と岩崎氏は、そわそわと帰ってしまう。

出版ブロックでは戸田氏のお声がかかりで大衆小説出版万能時代になった(7)。日配になって、その売上注文伝票を小売店から取るべく各社は競って出張員を各地に派遣した。遠く樺太、台湾、満朝(8)に至るまで。

出張員は自分の成績をあげるべく無理をする。それで伝票に事故が起る。日配の業務部長から私に注意があった。或る社では一度ダンピングに出た本の紙型を安く売ってまで、大衆本を集めた。出版文化協会でもこのブロックを知って悪質出版屋の集合と注目し、私にぬけると注意があった。私の店だけには大衆本がな

かつたから。

それを戸田氏に伝えても問題にせず、儲けるのは今だとばかり横流しの紙を買い漁っては

(以下、一頁分欠落)

によつて私は退陣を余儀なくされ、自分の店を離れ、もとの九尺二間の裏長屋へ引籠らねばならない無能力者となつた。その時の私の借金総額の発表は六十八万五千円ということであつた。銀行の小切手、振替、それらの印行は野島君が預かつた(9)。そして毎日、自転車で真冬の北風を切つて九段を上り、市ヶ谷を越えて、四谷坂町の野島君の宅へ行き、手形小切手の関係とその内容を説明しては、その日入用な金に対して野島君から手形なり小切手なりを振出してもらつて、それを持つて戸田氏はじめ、それぞれの先方へ行く。それと若干の校正がその日の役目であつた。月給は百五十円、それで夫婦と妹と姪と女中と五人が暮さねばならない。いかに昭和十八年とは言え、当時の物資と物価では、それで行ける筈はない。衣類一枚から靴一足に至るまで書き出して一切は三人の監理下で戸田氏名義に移した以上、靴下一足たりとも失くすことは良心上ゆるさない。仕方がなしに友達から、或いは女房の兄貴から五十、百と小錢を借りるのでなく、貰つて来ては、足し前にしていた。

時どき野島君から電話で呼び出される。今夜、何時に夫婦で来い、と。或いは六芸社座談会をやるから、みんなで来い、と言われる。或いは店員だけが呼ばれる。

私が昼食代として一円二十錢を何回か店から請求しているのがけしからんということになつた。橘君が、福田君、君の店員がこうしたら、君、それをやるかね、と反問した。お生憎さま、私はそんなしみつたれたことは致しません。しかし私は最早何をか言わんや、と決心したあとだから無言の行であつた。

突如として、店員のすべてが、それまでの旦那さん、を福田さん、と呼び始め、出版修業の熱意一つで私

の見所あつて拾つたような、紙の取り方すらもわからない青年が校正のことで私に食つてかかる。私が教えると、気に入らないと言つて、吉田君の所へ訴えに行き、今日からやると言うのださうである。今やめられると、あれでも店が困る、結局、将来の君にひびくことになるから、奴の思い通りにさせておけ、大体が大衆小説の校正なんだからね、と六芸社営業担当の吉田君が来て言つてゆく。

大衆小説とは言つても、獅子文六、矢田挿雲と有名なやかまし屋である。挿雲居士は、六芸社企画担当の橘君がわざわざ一日を六芸社のためにさいて、三島まで私を連れて行つて貰つて来た「江戸から東京へ」の原稿である。私は今でも挿雲居士と友達付き合いをして、橘君に感謝している。

経営、全体指導の任にあたる野島君はこれぞという出版物もない代りに加藤武雄だとか浅原六郎だとか、現代大衆作家の売れっ子ばかり持つていたので、早くも一丁上りで、既に業成り、戸田氏に二十何万かあつた手形もきれいにし、なお相當な金を握り、焦らず迫らず悠々と營業を樂しむ風に商売をやつていた頃とて、心に余裕はあり、面倒なことながら、人の内幕を覗いては何ものか精神に得る所ある一つの人生勉強でも言うつもりかの如く、それだけに親切で、時に手形の引繰返しまで三日、五日と二万、三万の立替もしてくれ、妹の縁談には仲人にまでなつてくれて、夫婦で一日を費し、砂町から川崎くんたりまで行つてくれた厚情に対しては、お役目とは言いながら今でも感謝に堪えない。

然るにその教育法となると別人の如く、大体に於てその方針は先生、戸田氏に相談しつつ実行していたやうであつたが、言う所の慈悲心からルーズな福田の目をさませてやるべき鞭には何かそれ以上の復讐心みたいな嫉妬みたいな剣が多分に含まれている。殊にその奥方に於て、それが露わであつた。今や学会にこの人ありと言われるほどの野島君、次代の理事長候補と擬されている野島君にして、その認識に欠け、その独裁主義的的態度は人に反感をすらかつて、私にも何としても首肯できない要素があつた。それが事ごとに橘君と吉田君と心の奥底で抵触した。それが私への吉田君の一つの同情となつて現われた。時どき野島君に夜、呼びつけられるのは、うるさかつたが、淋しく悶々の日の中にも、商手や菊水へ呼び出されて罵詈雑言され

ることを思えば何でもなく、そういうことがなくなつたのは助かつた。すると或る夜、菊水へ呼ばれた。野島、吉田、橘三君の無報酬の献身的六芸社奉仕に対し、今日かぎり福田君の金利はなし、ということにする、という御託宣が下つた。金利だけでも、これからは元金がへつてゆくわけである。

何てうまいことになつたのだ、と四海書房を背負つて立っている吉田君は言つてくれた。

その吉田君は営業担当とは言え、実際に六芸社では少量の一次的貸借以外に紙一枚お世話になつたことはなく、反対に私がお世話する場合があつた。出張員にしる共通に使うのであるが、六芸社には迷惑なことが多かつた。結局、最後には手形を濫用されるのが落ちであつた。いかにも吉田君らしく、今でも私は君のためには痛い目にあつてゐる。

その吉田君と野島君と岩崎君とが揃ひも揃つて商手倶楽部の信仰増進・営業飛躍という観点からの進歩賞というものを先生から貰つて、盛大なる祝賀の宴があつた。

その時、戸田氏は私を顧みて、いいもんだね、みんな小学校時代にお免状をもらつた時のような気分であつた。来年は君も貰うんだな、と言つた。私は苦笑した。

間もなく奥川君が脳溢血で倒れた。曾根君に次いで倶楽部で二度目の葬式である。

そのお通夜の晩が大変だつた。千種先生のお経まではよかつたが、酒が回つたところへ、奥川君の親戚から遺産問題が出て、冗談言ふない、ということになり、遺産どころか、遺産は俺んとこに手形になつて山ほど残つてら、欲しかつたら、いつでもくれてやる、その代りみんなその手形をきれいにしろ、と戸田氏ばかりか、誰かれとどなりたて、はては、奥川を棺桶から引つ張り出せ、ということになつた。始まつたな、と思つて千種先生を促し、早々に帰つた。困つたもんですな、と先生は、ひとこと言われた。感慨無量といつた風に、先生と私は暗い夜道を、だまつて歩き、信濃町から省電でお茶ノ水でお別れした。

その後と思うが、或る日、商手の二階へ何かの用事があつてあがつてゆくと、大変な場合にぶつかつた。十数名が堀米先生を取巻いて、四方から何か詰寄つてゐる場面であつた。丁度、神尾君が一人背の高い頭

をふりたて、大きな、あのどま声で先生をなじっている。それは堀米先生やツツけの会であつた(10)。

私はとんで帰つて来て、おい、えらいことになつたぞ、これは只事では済まない。俺はもう今日かぎり学会なんてものは縁切りだ、と家内に言つた。翌日、砂町へとんで行つて、私は、今度こそ見ました、創価教育学会というものの在り方とその姿とを、と言つて、その話をする、それこそ容易ならんことです。遠からず、必ず何か大珍事が牧口さんたちに起りますよ、これであなたがわかるのです、と先生の母堂が言われた。

その翌年(11)、太平洋戦争も、正味はまだ一年そこそこではあるが、早くも第三年にはいつた。

或る朝、野島君から電話がかかつて、ふろしきを持って、すぐ来てくれろと言う。何事かと思つて行つてみると、実は、と所謂学会旋風(12)の話聞かされ、だから自分も、いつ引つ張られるかわからない。だから預つた書類、手形、小切手、印行すべて返すといい、一人でやつてゆかれるか、ときく。心なしか野島君の顔は沈痛である。もともと自分の店だから、やれぬことはない、必ずやつてみる、長々たいへんにお世話になりました、と奥さんにも礼をのべ、御本尊に、もし自家の主人に万一の場合が起つても無事にお守り下さるよう、と、行くたびにこ挨拶する通りお願いして辞した。

陣野のバカと思つた。例の調子で得意になつて喋りまくつたにちがいない。それで相手が怒らなければどうかしている(13)。この前も先生は中野署へ留められた時、それを聞いて私は友人の弁護士に話すと、それはお気の毒だとて、すぐに電話をかけてくれ、その一言で帰られたことがある。だから先生、よほどご注意なさらんといけませんよ、と言つておいたのに、この状況というに何という軽率な話だろう、とは思つたが、思えば去年の秋の総会(14)に、お山の管長猊下(15)から、今、日蓮の再誕か、とまでおほめのお言葉を賜つた、牧口は死んでもこれで本懐である、と二千の聴衆の前で感涙にむせんだ先生である。あくまでも治安維持法と戦われることであろう、それは先生の本懐であろう。しかしこの事件がどこまで発展し、何人、何十人が引つ張られるかわからない、自分だとしてわからない、それらの弟子たちを何と思われるか。

弟子らしき弟子の主なる者は十何人行つてしまつて、大体これで止まりだろう、と思われる頃、橘君は言つた。野島君は君の身替りだぜ、と。私に裏長屋へ追い込んで座禪を組ませた人々が、いま私の身替り座禪を、あの別荘(16)で組んでいる。

寺坂、木下のいなくなつた跡などは言うに及ばず、折角、岩崎君を押し立てて天下の兜町(17)に進出したばかりの戸田氏も、蓋をあけてみると、支離滅裂、岩崎君に至つては鼻もつまみたいほどの下馬評ばかりであつた。

その善後策について何回か、戸田氏、ひいては我々に密接な金融関係を持つ川内氏を中心に集まつては鳩首協議をこらしたが、どうにもならず三月たち半年たつにつれて、一人去り、二人去り、ふたことめには我が八天王として、これがわれ唯一の財産なりと戸田氏の誇つた若き渡辺力をはじめ石井老も住吉マネージャーも段々姿を見せなくなつて、僅かに女性の身ながら森重さん(18)一人が孤軍奮闘を続けていた。絶えず私は連絡をとり、稲葉老の留守宅へも行つて、たとえ五千円について百円だけでも入金をしては森重さんの苦勞を和らげて行つた。

幸い私は企業整備による合同体に恵まれ、それと残務整理と称する横流し、さては帳簿から障子紙の製作に至るまで、応召、入営、徴用と一人の店員もいなくなつた、ガランとした店で、ただ一人勝手気儘に従來の取引を相手に、のんびりと、しかし怠らず活動をにつけた甲斐があつて、一年前に約七十万とうたわれた大借金も、いつか四十万を下回つて来た。もう一年というところで、とうとう私は焼け出されてしまつたが、別荘へ行つた人々が、どんな顔して帰つて来るだろうと思つているうちに先生が、まず獄死をされた(19)。まことに哀悼の念に堪えないが、さて翻つて、先生の創価教育学説ならびに学会というものを振り返る時、この一八・三旋風(20)が巻き起らなかつたなら、お山をはじめ我々学会関係者一同の自分の信仰というものの在り方と、その姿というものに画然とした整理がつかなくなつたであろうということである。

誰しも申合せたように感じたことは、まずうるさくなくなつてよかつた、ということである。

創価教育学会の回想

註

(1) 砂町教会 〓 東京・文京区に所在する日蓮正宗寺院、白蓮院の前身

(2) 「法華経入門」 〓 正確には「日蓮正宗法華経要品講話」。昭和六年、日蓮大聖人六百五十遠忌記念として出版された。

(3) 千種先生 〓 元白蓮院主管・千種法輝師（観法院日健贈上人）

(4) 戸田城聖氏は寺坂氏について後年、次のように酷評している。

「私は、まず、第一回の試みとして寺坂陽三氏を教育し、次代会長の貫禄をつげんと努力したのである。しかし、彼は小才子にすぎず、牧口会長の口マネのみして、学会内に勢力をうることのみ腐心し、ついには学会を二分しようとする機運にまで、立ちいたらしめたのであった。しかも、彼は法罰をうけ、故牧口会長を窮地におとしいれんとするの事件を、起こしたのであった」（「創価学会の歴史と確信」、戸田城聖先生論文集）所収）

しかし、この戸田氏の説明はにわかには信じがたい。なぜなら、二人の間になにかトラブルか誤解があったのだらう、「わざわざ北海道へ行っていた寺坂君の所まで戸田氏が出かけて、自分の怨嫉を詫びたことがあるという」との福田氏の証言と食い違うからだ。推測だが、戸田氏が酒ばかり飲んでいたので、寺坂氏を次代会長にと目して教育していたのはむしろ牧口会長のほうで、それを戸田氏が怨嫉したのではなからうか。理知的な寺坂氏と野人タイプの戸田氏——ちようど、戸田氏の後継問題で、石田次男氏と池田大作氏の双璧が拮抗していたのと同様の構図である。

(5) 出版ブロック 〓 出版クラブのこと。昭和十五年八月、創価教育学会の一分科として事業を営む会員だけで構成される生活革新同盟倶楽部が結成され、その中にまた出版業を営む会員八社で構成される出版クラ

ブがあつた。八社とは、大都書房、大道書房、四海書房、学芸社、橘書店、昭森社、奥川書房、六芸社。

(6) 非難の的であつた。昭和十七年八月発行の「大善生活実証録」創価教育学会第四回総会報告に、

「四月の例会では六芸社主福田久道君が専ら研究題目の中心となつた。同君の幸福を希ひその事業の繁栄を祈る大いなる親心を發揮し、同君の悪を除かうとしたのは西川喜右衛門君、岩崎洋三君、稲葉伊之助君で、殊に西川君の如きは『口で云つてもわからなければ今夜といふ今夜、自分達に鉄拳の用意があるぞ』とまで熱誠籠めての強折であつた」(54頁)

「五月の例会では再び福田久道君が一座を賑はす役目に回つた。同君は俱樂部ではなかなかの人気者である」(同頁)

と皮肉をこめて記載されているから、こちら辺の事情を指していると思われる。

生活革新同盟倶楽部は単なる実業家同士の懇親会などではなく、戸田理事長指導の下、「どうしたら借方の生活から貸方の生活へ発展出来るか、更に進んでどうしたら大善生活を実践出来るか、といふことが眼目」であり、「職域が実業であるだけに業績はすぐその月々の営業上に、或は集金高として或は貸付高として或は貸借対照表として動かすことの出来ない数字となつて現れる。むしろ恐ろしいくらい信仰即生活、事業即信仰の実証が掴める」(生活革新同盟倶楽部近況報告。野島辰次理事)、いわば練成道場であつた。毎月一回例会が催され、牧口会長、戸田理事長出席のうえ、各人の「信仰即生活、事業即信仰」の実験証明度が検証され、実績の芳しくない会員は厳しく叱咤された。

(7) 大衆小説出版万能時代。出版クラブ八社の中でも、とくに戸田氏の経営する大道書房は、子母沢寛、長

谷川伸、陣出達朗など当時人気があつた大衆小説家を動員し、百点近く出版、「月々の売上げは二十万円以上」になつたという(妙悟空「人間革命」)。ちなみに、昭和十六、十八年当時の小学校教員の初任給が五十、六十円、銀行員の初任給が七十五円、高給の東京都知事さえ五千三百五十円だつたから(「値段の明治・大正・昭和の風俗史」上、朝日文庫による)、戸田氏の稼ぎがいかに莫大であつたか窺い知れよ

う。したがって、敗戦直後、戸田氏が最初に手がけたのも、大衆小説の出版だった。日本正学館、日正書房、大道書院、大衆社などの出版社を立ち上げ、当初は順調だったが、急騰するインフレ経済のあおりを受け、ことごとく破綻した。

(8) 満朝Ⅱ満州（現・中国東北部）のこと。第二次世界大戦下、日本が中国を侵略し、満州に清朝の末裔である皇帝、溥儀を擁して満州国を建設、日本の傀儡政権を樹立した。日本国内からも「王道楽土建設」のスローガンの下、満蒙開拓団と称して、多数の殖民が行われた。

(9) 野島君が預かったⅡ昭和十七年十二月発行の「大善生活実証録」第五回総会報告掲載の「生活革新俱樂部報告」に「尚最近に於て部会員中余りに懸離れて不成績の某氏を部会全体の責任に於て救ひ上げて行く為に全員が其店の顧問となり特に野島、吉田、橘の三君が常任顧問として献身的に運営の指導に当る事になった」（32〜33頁）と報告されているから、このことを指しているのだろう。

(10) 堀米先生やつつけの会Ⅱ堀米先生とは東京・中野に所在する歡喜寮（現・昭倫寺）主管、堀米泰栄師（後の大石寺第六十五世・日淳上人）。堀米師は毎月、教育学会本部に赴いて、法話を行っていた。この、いわば吊し上げともいうべき「やつつけの会」事件は、昭和十七年十一月六日、教育学会本部で、幹部十数人によって引き起こされた（「大善生活実証録」第五回総会報告56頁参照）。

この「やつつけの会」事件について、次のような興味深い証言がある。

「金川氏 福岡のお寺でなかなか御授戒がお願ひ出来ないの、困つてお願ひに行くとお勤めの時ならいつでもよろしいと緩和された。今日では昼間でもやつて下さるやうになり喜んでゐるが、この事について先般寺坂さんがおいでになつて、和尚さんに会つて、過去の誤評を攻められた。かういふ場合はあくまで和尚さんに懺悔滅罪させなければいけないものであらうか。

本間氏 やはりお寺の人に関係のある問題であるが、先般堀米師は非を認めながら頭を下げない。自分はどこまでも懺悔させるのが、弟子の道と思ふ。（中略）

神尾氏 堀米師の場合は言質を取つた。(以下略) (同報告45く46頁)

この「言質を取つた」というのが、冒頭で触れた吊し上げ事件の結末だったのだろう。「言質」の内容とは、「過去十年來の結果に於て創価教育学会の信仰指導には何等の弊害はなかつた。但し將來は弊害があり相である」(56頁) というもので、堀米師は学会の將來に警鐘を鳴らしているのだが、学会としては、従來の折伏の実績に宗門への貢獻がともかくにも是認されたので、それでよしとしたのだろう。右に引用した記事から推察すると、地方寺院でも吊し上げまがいの行為が行われていたことが窺える。

こうした僧侶吊し上げ事件が惹起される背景には、従來寺院側が教育学会の、罰論を振りかざした折伏方法に違和感を抱き、積極的に本尊下付に應じていない情況があつた。牧口会長も次のように、寺院側を手厳しく批判していた。

「旧式信者の中には『創価教育学会の連中は罰をいつたりしてひどい』と非難して折角信仰に入つた弱い婦人などを退転させるものがあると聞くが、御自家の御僧侶中にも一緒になつてかういふ事をいふ人があるといふことである。これは容易ならぬ謗法の行ひである」(「法華經の信者と行者と學者及び其研究法」、「大善生活実証録」第五回總會報告4頁)

なお、昭和十八年七月に警察に拘引された戸田氏は獄中から夫人に充てた手紙(S19・9・6付)の中で、「堀米先生二、去年、堀米先生ヲ『ソシツタ』罰ヲツクツク懺悔シテオルト話シテ下サイ。『法ノ師ヲソシリシ罪ヲ懺悔シツツ、永劫ノ過去ヲ現身ニ見ル』ト言ツテオリマスト」と悔悟の念をもらしている(戸田城聖「若き日の手記・獄中記」146頁)。

しかし、獄中で一時的にも改悛・懺悔したはずの戸田氏は戦後、こうした、創価学会の方針に反対する宗門僧侶を吊し上げて、学会の意向に随わせるやり口を、いわば学会の伝統と化した。主なものを列挙すると、①戦時下、神本仏迹論を唱え身延との合同問題で暗躍したとされる小笠原慈聞師に強圧的に詫び状を書かせたり、②戦後まもなく学会が独自に宗教法人を取得しようとした際にも、反対する宗会議員のと

ころに青年部が押しかけて、押問答の末、強引に了解を取り付けたり、③学会の荒っぽい折伏法を快しとせず、本尊下付を拒否した大阪・蓮華寺を多数の学会員が包囲したり（後に、蓮華寺は日蓮正宗から離脱し、日蓮実宗として活動）、④昭和五十年前後には、創価学会が日蓮正宗の伝統教義から逸脱する動き（いわゆる52年路線問題）を見せたとき、これを御講の説法や宗内論文等で批判した僧侶を学会施設に呼びつけ、吊し上げて詫び状を書かせたりしている。

(11) その翌年〓昭和十八年

(12) 学会旋風〓昭和十八年七月、牧口常三郎会長をはじめとする創価教育学会幹部二十一名の一斉検挙事件
(13) 陣野のバカ：どうかしている〓昭和十八年六月初旬、東京・中野でクリーニング店（チンノ株式会社）を営む陣野忠夫氏（教育学会中野支部長）が、近所の人を折伏しようとして、その子供が死んだことを

「罰だ」と決め付けたことで、その人が激怒し、警察に訴え出たことから陣野、有村勝次（チンノ株式会社専務、教育学会理事）の二人の会員が警察に逮捕されたことを指す（おそらく二人で折伏に赴いたのだろう）。この二人の取り調べから特高警察は創価教育学会への罪状（治安維持法違反、不敬罪容疑）を作り、翌七月の一斉検挙となった（佐木秋夫・小口偉一共著「創価学会」67〜68頁）。

(14) 去年の秋の総会〓昭和十七年十一月に行われた、創価教育学会第五回総会。

(15) お山の管長猥下〓日蓮正宗総本山大石寺第六十二世・鈴木日恭上人
(16) 別荘〓留置場や拘置所を指す。

(17) 兜町〓東京都中央区日本橋兜町。証券会社が密集する、株取引の中心地。

(18) 森重さん〓森重紀美子氏。戸田理事長の秘書的存在といわれ、一説には愛人だったとの噂もある。戦後の一時期、金融会社・大蔵商事社長も務めた。

(19) 獄死された〓昭和十九年十一月十八日、牧口会長は栄養失調で病死した。享年七十三。

(20) 一八・三旋風〓一八・七の間違いか。

註(補遺)

(1) その年の秋には……これが創価教育学会の初の会であった(17頁1〜3行目) Ⅱ「年譜牧口常三郎・戸田城聖」(第三文明社刊)によれば、昭和十二年の「秋頃、創価教育学会発会式(茗溪会館)に出席」(94頁)とあるから、このことを指すのだろう。しかし、場所が菊水亭でなく茗溪会館とされている。福田氏の記憶違いだろうか。福田氏は続けて「それがその翌年には、その二階の大広間がいつぱいになるほど会員がふえた」と記している。これは「年譜」の昭和十三年の項、「12月13日 創価教育学会第一回総会(麻布・菊水亭 約六〇人)に出席」の記述と合致する。

(2) 稲葉氏(18頁13行目) Ⅱ稲葉伊之助氏のこと。稲葉氏は牧口・戸田両氏と並ぶ古参の幹部で、本業は下駄屋だったが、牧口会長と縁戚関係にあったせいか(長女が牧口会長の三男に嫁いでいた)、戸田氏にも重用され、本業の下駄屋は店員に任せて、繁盛していた戸田氏の金融業に携わっていた。野島辰次氏の証言によれば、戸田氏の金融業は学会員を相手にしたものだ(「我が心の遍歴」76頁)。昭和十八年七月六日に牧口・戸田氏らと同時に逮捕されている。しかし戦後、戸田氏は牧口会長、矢島周平理事以外の幹部は「名誉ある法難にあい」ながら、悉く退転したと稲葉氏らの名を挙げて断罪した(「創価学会の歴史と確信」、「戸田城聖先生論文集」111頁)。ところが、稲葉氏の遺族は法華講員として信仰を持続しているし、幹部の一人だった野島辰次氏も戦後は法華講員として信心を全うしている(野島辰次遺稿集「我が心の遍歴」参照)。要するに、戸田氏にとって学会退会者は退転者扱いだったのである。

牧口会長の学説について

創価教育学会、これはいい名称である。

しかし教える所の創価、即ち価値の創造ということは、私にはどうしてもわからない。

お前はバカだ、あれほど先生に御指導を賜わりながら、まだお前にはそれがわからないのか、と言われるかもしれない。

なるほど、言う所の御指導というものを私は、この学会の創設者たる牧口さんから受けたわけではある。

しかし私の受けた御指導とは、法華経への入門書としてであった。それが先生の価値創造なのだ、入門へと導きながら、価値の創造を説かれたのではない。(※以下、一行判読不能)

証文通りに、たしかに貧乏人は金持ちになる。少なくとも暮らしに困らなくなる。病人は癒る、悪人は善人になる。即ち成就仏身だからである、ということになると、わからなくなる。簡単に明瞭であるようでひどく巧利論的信仰に聞こえて、信仰という自分の概念とはおよそ遠くなって、もしこの信仰にして、そういうものなら、いやになる。しかし実験証明がそれに百発百中する。

事業もこうだ。出版もそうだ。その証明が、戸田君、野島、広田君だ、むずかしいことはない、それを実生活に素直に応用しさえすればいいのだ、と先生は言う。そうすると、出版ブロックみたい、まずその質的検討も目的も手段もえらばないのが実利論だ、言いかえると、それでも一人で儲けて早く借金を返せということになる。

その利がどうして真と置きかえられねばならないのか、そしてその利こそ真であるというのがわからない。利は価値である、価値は関係にある、それはわかる。だから関係すれば、即ちこの法を食せば、利益多しとある。

それもよくわかる、それとして。しかしそれなら方法論だけで、その本質論というものはないのであろう

か、これが私の懸案であつた。

そこへゆくと言憾ながら、私は先生の著わすところの創価教育学説全五卷(1)なるものを読んでいない。だから、その学説について語る資格は私にはない。なんでも大變むずかしいものだそうである。そう聞けば聞くほど、私の向学癖というか、思索癖というか、私の哲学的要求は、それを、どんなに忙しくとも一度は通読させていた。だきたいと私をして思わせた。

しかし、それも先生を知つてから二、三年の間のことであつた。私はそれを読む必要はないという気持ちに變つた。失礼だが、その当時の感情で言えば、そんなもの、だつたのである。何故かと言えば、私は先生に接し、具さにその学説の拠つて來たる所の指導原理及びその方法と表現というものに接したからである。それ故、私はその学説について語ることを許されない全くの無資格者とは言えないであらう。しかしここでは、その学説の具現とも言うべき学会について語るのが私として至当であらう。

ただ学会について語るることによつて、必然的にその学説に正当な把握をもつてふれることが出来れば幸いである。

この学会には、誰でもが直ちに感得し得る明確な、まことに紛うかたなきほど明確な一つの傾向がある。それは一つの方向でもある。しかし方向となると、その目的が甚だ不明瞭である。何故か。それは、その教育指導なるものが、この学会に依らざれば、或いはこの学会を通さざれば、お山への当家の信仰は成り立たない、少くともその精進進歩は得られないというが如き感をいだかせるからである。

第一、そんな学説があるのか、そんな学会があるのか全然何も知らない私が、戸田さんの教化によつて、この信仰につき、先生の存在を教えられ、その言説に接し、私には非常に魅力的な啓蒙を受けて歡喜していると、いつの間にか私はこの学会の「幹部」になつてゐる。その幹部が今度、悪人、ろくでなし、になつて、明けても暮れても罵詈譏の包围陣に取りかこまれ、何とかしてそこを脱出しようとしても、私は戸田氏との深い経済関係の中に置かれていて、それがまた私をガンジガラメにして、どうしても抜け出ることが出来

なくなっている。

一度この法華経についたら、いくら逃げようたつて、三千世界、聖徳太子の言われたように、天が下逃げ場はない、とおどかさされる。そういう信仰だつたら君、登山すればするほど悪くなるぞ、と睨みつけられる。その通りで、それがよくわかっている親だから、淵にのぞむわが子を見るように言うのかも知れないが、何も知らない、ただひたむきな私には恐喝、脅迫としかひびかない。

西欧の文学、美術、哲学の片鱗にふれ、宗教と言えば西欧の文芸、美術、哲学を解し、それに親しむに必然的に要求されるバイブルを通してキリスト教の匂いをかいだことしかない私にとって、世界最古最大の聖典を、文学、美術、哲学から音楽に亘つてまで偲ばせる仏教上の諸々の言葉とその意義の解明は、私には何と大きな魅力であつたらう。

だから先生の跡を追い、そのしわぶきを慕い、誰かれにその利益を説いた。しかし学会が漸く盛大になり、組織づけられ、所々にその座談会なるものが催されるようになる、先生の中心説法は人々に、子供だましみたいな、欠伸あくびの出るような話としかひびかぬ態ていのものとなり、或いは、またか、とそれにまひしたような空虚な状態が来る。剩あま座にいたたまれぬほどの、それはもはや指摘の域を越えた非難攻撃の速射を誰かが感受しなければならぬ場合に遭遇することが屢々しばしばであつたから、たまたま、いいことを教えられる喜びを持ちつつも、人々は二の足をふむことになる。そうすると、なぜ来なかつたか、来ないか、と先生またはその代弁者の誰かから言われる。それが強要的に人々にひびく。そこへ来ると、人々はうるさくなり、信仰とはこんなものか、そんな筈ではないという気持ちになつて遠ざかる。そうすると、それ退転だ、懈怠だ、とまたまたその代弁者に詰めよられる。自分の御本尊は何がなし有難いと思ひ、お寺へは行きたい、お山へは登りたい、と何がなし御本尊と戒壇とを慕ひ恋うる心はあつても、何か学会というものにそれが阻まれる気持ちあがして、遂に信仰そのものを棄て、或いは淋しく一人信仰にと離れてゆく人々の、いかに多くあつたことであらう。(2)

一八・三学会旋風の起つた後、異口同音に人々の言つたことは、これで心静かに信仰が出来る。うるさくなくなつて有難いという言葉であつた。今でも、どうして戸田さんの所へ行かないかときけば、五人が五人まで、あの連中にふれると、うるさくつてね、と答える。今は決してそんなことはないようだ、と言つても、人々はそれを信用しない。それほど学会というものは、人々をこりごりさせている所がある。

先生の、及び学会の、教化、折伏、そして御本尊へ、御本尊へと多くの人々を送り届けた功績は、どんなに大きな功德だかわからない、しかしその反面にお山への広き門を、いかに狭き門にしたかも争えない。功罪相半ばすると言うが、それはいづれか私にはわからない。ただ私はそれを、先生の獄死、ということ、ひそかに判断するばかりである。そしてこの牧口さんを、日蓮の再誕か、と仰せになつて、牧口さんを二千の聴衆の前で感涙にむせばせた前御法主猊下の、あの業火の中の非業な御遷化を私は思うばかりである。

この学会は誰もが一応の法華經的思想家ではあつても、この学会には眞の思想家という者が一人もないように思われる。従つて一人の批評家もないように思われ、それがこの学会の何よりの不幸であるように見える。それは、お山及び全日本の在り方と同様であるが。

私は今、その昔よく仲見世(3)などに売つていたお相撲さんのドロ人形を思い出す。板の上へのせられて、その板を叩かれると、あつちを向いたり、こつちを向いたり踊りながら、ふしぎに組みつく格好になつて倒れる。

当時の学会の姿は、さながらこのドロ人形のお相撲さんの姿であつた。狂信である。一つの勢いである。入信一年にして私ごときが忽ち学会の幹部とならせられた如く、二年にして忽ち理事長候補にまで擬せられた野島辰次君がある。しかく牧口さんの教育型というものがあつて、それは受取るに誰でも至難でないといふことである。だから誰の言うことでも、私にはそれがオームの声に聞こえてくる。先生の教育目的から言えば、その早教育法に叶つたものと言うべきであろうが、それはどこまでも夜学的速射法で、或るレベルに來ると、忽ち成長がとまつてしまつて、少しものびのびとしたところがない。無限の伸展性がない。

ひと口に言えば、この学会は、全体主義的、実は独裁主義であつた。創価教育学説としての思想体系？の中に於てのみ喋るだけで、その範疇以外のこちからの言葉というものは一切取りあげられない会であつた。共鳴と尊敬と謝恩と懺悔滅罪という過酷なまでの陳謝の要求はあつても、相手の人と心に対する認識への心づかいと、その不満、疑惑、弁明乃至批評というものは、ただ罵詈と讒謗でのみ圧伏されるだけであつた。少くとも私の経験はそうであつた。だから信仰というものに入つても、魂の安息などというものは得られなかつた。

そのよき例が戸田さんの、家来ども、土百姓、の大喝であつた。こうなると、手もつけられない。毎晩の酒席が殆どそれであつた。暴君的君臨でありながら、駄々つ子のやんちゃであつた。信仰上のボスであつた。いかに破産宣告を下す債権者でも、或る期間、私に臨んだ野島君の越権、弁護士の大滝さんに対する牧口さんの気ちがい呼ばわり、奥川君のお通夜の晩の戸田さんの暴慢非礼、更には堀米先生やツつけの会等々、枚挙に遑なきボスぶりは既に人間として許しがたい。それがこの会では、ふしぎにケロリとした顔で通るのである。通るばかりでなく、それが最も正当づけられるのである。

一生懸命に牧口さんの口まねをして、自行化他をモットーにいろいろの人々を教化した私は、その頃からびつたり折伏をやめてしまった。私が受けたような荒行にその人が堪えられるかどうか、それはむしろ蛇の生ごろしみみたいな罪悪だという気持と、私はこういう信仰についている、こういうよい先輩、同志がいると言えない、かつての自分が持った法華経の高い誇りを傷つけられた悲しさと、自分が置かれた惨めな立場の恥ずかしさとから。

なんとというファツシヨであつたらうか。

だから牧口さんは蒋介石(4)を揶揄し、ルーズヴェルト(5)、チャーチル(6)を嘲笑し、スターリン(7)を魔物扱いにして、ヒトラー(8)、ムツソリーニ(9)を英雄としてほめあげ、東條(10)を加えて、世界の三羽鳥と賞賛し、日本を東亜解放の救世主と誇り、大東亜戦争をもつて広宣流布の前提と見なした。それは当時の一

般的通念であり、常識でもあった。

広宣流布とは、この信仰者以外にはわからない意味を持つが、その感じだけは誰でも受けられるであろう。だから牧口さんは国民一般の思想と同様な思想家ではあつても、決してそれを指導する思想家ではなかつた。広宣流布の暁という觀察に共鳴する私たち信仰者の誤謬を指摘し、法の法たるの道、法の嚴然たる正しさを歪曲する私たちの心を矯正する指導者ではなかつた。

何故なら、これほどの大法に依る、あれほど熱烈な信仰者ではあつても、牧口さんには批評精神の哲学的思索の働きの欠如していたからである。いかに熱烈であつても、いや熱烈であればあるほど、それは狂信であつて、狂信の前には、すべてものの本質と実体とは姿をかくしてしまつたからである。ものの本質と実体とが見えないところに、真の慧眼はなく、真の慧眼の働かざる所に真の批評の生れる筈はなく、真の批評のない所に、中道の真理が発見されよう筈はない。

この中道の真理とは、私たち信仰者にとっては、単に哲学的探求による発見であるにとどまらず、言うところの御仏智によつて感得し得るものであると思う。

この中道の真理を措いて人類の如何なる安寧があるか、福祉があるうか。広宣流布と言ひ、仏の本懐と言ふも、畢竟するに、この中道の真理の具現ではあるまいか。私はそう考える。もしそうだとすれば、その中道の真理をいだける者こそ、決然として首の座を悟り、時の最悪なる政府に向ひ、天皇の御宸襟に対し、分けても軍部に対して、それこそ誠惶誠恐謹んで申さねばならぬ絶対的な機会であつた。況してや、日蓮が再誕か、と仰せられた、これで死んでも牧口は本懐である、と感涙にむせんだ先生ではないか。その感涙が泣くであろう。いや、その感涙のゆえに目がかすんで、先生には天下の大悪法が見えなかつたのであろうか。天下の大悪法とは、言うまでもなく治安維持法という、古今古来いとも稀れなるナチス・ドイツの焚書令にも匹敵すべき大悪法である。

かかる現代の御申状の出現をお山に期待した私は、お山はその背後のものという気がして、ひたすら牧口

先生に、それを期待したのであった。先生は、そこまで行つてほしかつたのである。それでこそ、文字通りの御法難であり、貴き殉教と云うべきである。あれでは一人でいい氣持になつて感激しながら、とんで火に入つた夏の虫にしかならないではないか。重臣財閥、国を救わず、軍閥官僚、国を亡ぼす、と喝破して遂に軍の手でぶち殺された中野正剛(11)に、一籌いっちゆうを輸し、たえず世の状勢と雰囲氣とをかぎ分けながら、あくまでも人類の合理的安寧福祉を弁証法の發展によつて説いた三木清(12)、戸坂潤(13)諸氏を思う時、七十三歳の老教育家は、あまりにも大人氣なく、あまりにも教育家の悲惨な末期を思わせはしないだろうか。

獄中で、それをどう解決したか。

教育家とは人の顔さえ見ると、人に教えたがる癖がある。保険の勧誘員と女宣教師と、共にそのお喋りが、私は昔から大嫌いであつた。何故なら、彼等は相手の心、考え、欲求には一向に頓着なく、それがどんな人格だろうが、どんな歴史を持つ人間だろうが、決してそれを振り返ろうとはせずに、自分の喋りたいことだけを、実はそれが職業意識でありながら、恰も天与あたかの使命の如く喋りたてる。一人ぎめであり、一人呑み込みである。そこには礼儀もなければ好感もなく親愛がない。

別荘から歸つて来て初めて会つた時、永い間ご苦労さんでした。でも元氣でよかつたことね、と私が言葉をかけると、その相手は矢島周平君である。その後、私がどうしていたかも知かずに、いや、戸田さんの所で働いている君ではあり、その戸田さんの所へは度々行つてゐる私だから、その後、私がどういふ生活をしてゐたか、おぼろげながらには知つてゐるだろうと思ふのに、その矢島君の挨拶がふるつてゐる。それで、あんな、退転したのかね、と云うのである。何をか言わん哉である。

時どき柏原おヤスさんに会う。ぜひ座談会へいらつしやいよ、それはとても今さかんよ、と云う。またの時、それはとても今は活発よ、と云う。次の時、修養会があるの、ぜひこれだけはお山へいらつしやいよ、と云つてくれる。現在の自分の境遇の仕合せと共に、よほどの感興があるのであろう。それはよくわかる。相手は何もかも見て来た私である。それはしかもとうの昔から要略広と、教わつて来た筈のおヤスさんであ

る。しかし芸術の表現の効果というものを知らない人だから仕方がない、お気の毒な人である。

たまたま本間君と岩崎君が自動車で通る途中、雨のそぼ降る中で、いきなり言う。今度学会が復活したについて、君に神田支部長になつてもらいたいのだが、と。へえ、それは初耳ですね。それだけに、おいそれとは引き受けられない。今の学会の在り方というものが、どんなものか、まずそれを拝見した上でないと、と私が答えると、そんなむずかしい問題じゃない。そんな面倒なことなら困る、じゃ、と行つてしまふ。その話は今日までそれつきりであるが、いかにも商手時代の空気を思わせられる。

先達で、砂町教会のお会式が豊島教会(14)で行われた。式後、座談会をやるから君残つてくれ、とおヤスさんが言う。私は帰りにお邪魔します、と細井先生(15)にお約束したので、夜になつては困るなと思つたが、義弟の嫁をつれていたので、初めてのそういう空気を見せておきたいとも思い、矢口君も久しぶりで伺いましょうと言う。細井先生には改めて出直してお詫びしようと思つて残ることにした。

千種先生の伯母さんと一別以来のご挨拶をして本堂へ行くと、もう何か大きな声をして青年が喋っている、その相手は法誉さんとその同僚の秋山さんである。その青年は井口さんとか言つて、そのおばあさんが熱心な長い間のご信者である由、どおりでその青年は、さつき太鼓を叩いたのだな、と私は思いながら聞いてみると、そのおばあさんがお山のどこかの石段を御供養すると、それをお手柄のように吹聴する、そればかりでなく、法誉さんに対し再三不愉快な、それが信仰の誇示的言動を示した、それによつて法誉さんは、君のおばあさんの信仰は多分に宣伝信仰だ、と指摘したのだということである。すると、それでもいいじゃないか、関係がついたということは、とか、宣伝的でも何でも、御供養しないよりはした方がいい、と矢島君が判定者のなもの言い方で言う。すると、おヤスさんが、それでは一体誰がそれを断定したのです、断定は結果を見なければわからない、その結果とは死相です、という風に喋る。法誉さんが、それでは例えばですね、なんて、由井正雪(16)の例を持出す。

しかし、いずれもその場合の適例のようでないながら、ぴつたりこない。話が混乱する。矢島君が、僕は御

本尊さまの御功德とは、そんなちつぽけなものではないと思う、と自分の信仰観に話を持って行ってしまい、初めから話の焦点に來ないで、それらしくありながら、どこまでもピントの狂ったみたいな話し合い方で、その後はどうなったか、私たちは中座して矢口君と話しながら帰った。相変らずですわね、あれじゃ、ちつとも以前と變るところがありませんね、あの連中は案外アタマがわるいんだね、いや、わるいより古いんだ。してみると昔、活発に左の運動をしたという矢島君にも似合わず、いくらかヤキが回ったかな、などと思いつながら、たびたび來い來いとおヤスから言われた座談会へ疲れた体を無理にも運ぶ気にはなれなくなつた。去年の八月から何回もお訪ねしては会い、会つては、その後あこうと話してきた相手の戸田さんが、先達てふと何を思つたか、私に、君、信仰しているかい、ときく。千種先生の御帰還を伝え、当分私の小屋を砂町仮教会として來る何日にその開所式があると話したのも私である。その時、それはおめでたい、僕もぜひお目通りに出向くと言つた戸田さんである。

それで私は言つた。お坊さんと一緒の生活をしていて信仰しない筈はないでしょう、と笑いながら。言うまでもなく、この場合お坊さんとは、尊師千種先生のことである。すると、了性坊の井口先生の名前が出た。

君、知っているかい？ と戸田氏は言う。ヤミをやつて放り込まれたというじゃないか、と。千種先生のお留守中も母堂とは屢々、起居を共にし、最近では何ヶ月も御一緒に暮らした私である。前猥下の御遷化も半信半疑で法道院さんへお知らせした私でもあつた。戸田氏はお留守中のことゆえ知る由もなからうが、日開猥下御遷化の時にも、この学会関係でただ二人だけしか登山する者のなかつた、その二人としてお目通した私たち夫婦である。

だから大抵のことは、私は知っている。

今ではヤミに關係を持たない生活者というものはないでしょうからね、と私は答えた。

だつて君、買ったんじゃなくて売つて儲けたんだろ。でなければ放り込まれる筈がない。俺たち凡俗なら

何をしようとかまわないが、苟くもお山のお坊さんともあろう者がひどすぎる、と戸田氏は言う。

理境坊から性坊へ移ったというところで、所謂了性坊問題(17)では、牧口さん、戸田さんはじめ稲葉老から、野島、寺坂、西川諸君、さては藤森富作君に至るまで、みんなから、さんざんにやツつけられて来た私であるだけに、戸田氏もこの問題は誰と話すよりも私となら話す張り合いがあるのであるのか、今もってこの了性坊問題が問題として戸田氏らの間では出るそうで、むしろその意味も含まれていたようだ。

ヤミで井口琳道先生が幾日かつかまったことは知っていても、それが何の理由かは、私は詳かにしない。またしようとも思わない。あの田舎の狭い土地だもの、五円の玉子を六円に信者に売ったって、それが百個二百個ともなれば当然問題にもなろうし、またなつてもいい筈である。それはもとよりお山はじめ、お坊さん仲間、いわゆる塔中たうちゅうとしても決して名誉な話ではない。顰蹙すべき事柄である。

しかしあの井口先生のことだもの、ありそうなことだが、それほど破廉恥なことをなされたとは、私には考えられない。むしろいかにもあの先生らしく、ほほえましさを私は感じる。そして十界互具の働きが生き生きとうか泛んで来て、お客殿炎上の砌、あの先生が無双力をしぼって、あの大きな御本尊を身をもつてかつぎ出したという姿が偲ばれる。

本間氏は言う。戸田もずいぶん変つたぜ、先生も君もあつたもんじゃない、ずいぶん謙遜にもなつたしね、と。

それはそうであろう。お題目十五万遍(18)をあげて死線の難行苦行をして来たのだから。

たしかに親しみをおぼえる戸田さんである。何か話したくなる戸田さんになった。しかし私にとつては、秀英社時代の戸田さんのなつかしさである。しかしその生来の性格と後天的習性と共に現在の戸田さんの人生観や社会観には、私は多分の疑念を感じずることを免れない。

牧口先生の遺鉢を継ぐ者として、恩師を最も尊敬する弟子として、君を措いて他に人はないのは明らかである。そして学会を再組織し、発展せしめ、一人でも多くを御本尊へ御案内申すことは君の貴き使命であり、

残された、如何なる君の事業よりも重かつ大なる仕事である。それは遠く且つ岨しい道であろう。

私はその君の姿を見守りたい。それには、君は、まだまだ、もつともつと幾重にも過去の残滓ざんしを脱皮しなければなるまい。私たちも同様に。そしてお山への狭き門を取り払うこと、これが何より大切と思う。具体的に言えば、一人二人と君の所へ昔の人々が帰つて来ることである。それらの人々に再認識をあたえることである。それには甚だ不利な悪材料を、君はじめ矢島、本間、岩崎、柏原諸君が私にあたえた。二道をはげみ候べしとあるからには、法華經の講義？も大切である。しかしかつての私のように小利口にならずに、のびやかな大馬鹿になつて、その肉体ぐるみが聡明の光を放つような人間に成長したいものである。それにしても、もつと身近に、生活的に、根本的に大革命が、そろそろ来てもいいような気がする。再組織の学会は、どこまでも牧口さんの精神的フォルマリズムとマンネリズムを一步も出ていない姿をとどめているからである。

少し滑稽な引例に聞こえるかもしれないが、牧口さんをヘーゲルとすれば、戸田さんはマルクスになつてほしいものである。冗談にも、以前のように、先生を大聖人とすれば、俺は御開山上人、そして稲葉が日目上人だ、などと夢々言わないことである。そうすれば僕はエンゲルスになるだろう。それには第一に、その出版事業に於て進歩性がほしい。高貴な創造性がほしい。苟くも出版とは芸術に於ける創造に次ぐ理念の創造事業でなければならぬ。石鹼や毛糸の製造業とはちがうのである。信仰の生活であれば、朝夕のお勤めと共に、その日その日は、既に一つの精神的創造である。それはこの信仰を持ち得ない人々にない仕合せである。しかし私の言うのは、その創造より来る、何らかの所産の意味である。しかも中にこの信仰を体し、価値創造を奉ずる君である。その君にして、それが出来ない筈はない。

なるほど君には大きな債権の責任があるう。それは莫大な折伏費用であつたかもしれない。それは思えば沈痛であろう。しかしそれも私の十倍と仮定したら、どうであろうか。もし当たらずといえども遠からずとしたら、君から脳バイとまで罵られた私に於てすら、野島、吉田、橘三君の生産管理を受けた時(19)、六十

八万五千円也と発表された借金は、三君の犠牲的奉仕に対する答礼として私だけが無金利になったおかげで、諸君の留守中、一年半でその半分へった。もちろん時代はちがいがい、今ではそんなわけにゆかないからこそ、相変わらず屋台のおしるこ屋を有難くやりながら、毎日喜びをもって原稿書きをしているけれども、三年前と今日では、その通貨価値が十倍もちがうのだから、君にして三百五十万円ぐらいは大したこともなからうし、軍というもののなくなつたこの世、戦争というものを、世界に率先してすてた日本、天皇が元の天皇に立ち返つた日本、これでこそ神も仏も喜びたまうであろうような希代な日本になつたではないか。そこに生れ合せ、あと幾許も生のない私である。力のかぎりお互いに働こうではありませんか。そして借金を返しなから、お山のお役に立とうではありませんか。御本山の石段改修も結構ではあるが、敗戦後の日本のことであれば忍べるかぎりは御本山にも我慢して頂いて、まず復興からとゆこうではありませんか。東京、だけでも、あと妙縁寺、本行寺、砂町教会の復興建築、地方末寺の復活等々、我々に与えられている仕事は山ほどある。私はそれをしながら、日尊上人の東北三十六ヶ寺建立の如く、お寺の代りに創作を、誰にも真似の出来ない金字塔を三十六編うちたてて終りたい念願である。

その他のことは、出版にまれ、人事にまれ、私にとって風の前の塵なるべし、南無妙法蓮華經（三唱）。

牧口会長の学説について

註

- (1) 創価教育学説全五巻Ⅱ正確には、「創価教育学体系」全四巻。牧口氏の構想では、全十二巻を予定していたらしい。今日、創価学会では、第一巻発行の昭和五年十一月十八日を創立の日としている。
- (2) いかにも多くあつたことであろうⅡ罰論を振りかざした学会の過激な折伏法の反動か、退転者も続出したらしく、教育学会の中には退転防止委員会まで設置された。幹部三十名が委員に任命されているから、退転者はかなりの数に上つたと思われる。昭和十七年十一月開催の第五回総会では、戸田理事長を座長とする幹部座談会の席上、退転防止対策が議論されている（「大善生活実証録」第五回総会報告44頁）。
- (3) 仲見世Ⅱ東京・台東区浅草の浅草寺界限の商店街。
- (4) 蒋介石（1887〜1975）Ⅱ中国の軍人、政治家。日中戦争下、毛沢東率いる中国共産党と抗日民族統一戦線を組み、勝利した。戦後、初代中華民国総統に就任したが、共産党との内戦に敗れ、台湾に亡命、中華民国政府を移した。
- (5) ルーズヴェルト（1882〜1943）Ⅱ米国の第32代大統領。第二次世界大戦に連合国として参戦し、豊富な軍事力と資金で連合国側の勝利に貢献した。
- (6) チャーチル（1874〜1965）Ⅱ第二次世界大戦下のイギリスの首相。当初、劣勢だった英国を強力な指導力を發揮して、勝利に導いた。
- (7) スターリン（1879〜1953）Ⅱ第二次世界大戦下の旧ソ連の首相。当初ナチスドイツとの間に独ソ不可侵条約を結んだが、後にドイツがこれを一方的に破棄しソ連に侵攻してきたため対独戦に参戦、連合国の勝利に貢献した。戦後、国際政治面ではスターリン主義と呼ばれる独自の社会主義路線を敷いたこととで有名だが、国内的には左右の政敵を次々と抹殺し、独裁強権政治を長期にわたっておこなつた。

- (8) ヒトラー（1889〜1945） 隣国ポーランドに侵攻したのを契機に、第二次世界大戦を引き起こした、ナチス・ドイツの首相。ゲルマン民族の純粋性・優秀性を強調する反面、ユダヤ民族を「悪」の根源として敵視、ホロコースト（民族虐殺）を実施して世界を震撼させた。首都ベルリン陥落後、自殺。
- (9) ムッソリーニ（1883〜1945） 第二次世界大戦下のイタリアの首相。イタリアのファシスト運動を指導し、独裁政権を樹立、ドイツ・日本とともに日独伊三国防共協定を締結し、連合国と戦ったが、大戦末期、国内のレジスタンス勢力に捕らわれて処刑された。
- (10) 東條英機（1884〜1948） 昭和十六年、軍部から総理大臣に就任、陸相・内相・参謀総長を兼任し、ファシストと呼ばれるほどの絶大な権力を振るい、国家統制、とくに言論統制を強めた。敗戦後、極東国際軍事裁判でA級戦犯と断罪され、絞首刑に処せられた。牧口会長は「大善生活法実験証明の指導要領」と題する論文の中で、「東條首相の『協同一致』の中心は如何」という一項を設け、東條の唱える「協同一致の精神」の究竟の目標を確立しよう、と訴えている（「大善生活実証録」第四回総会報告3〜4頁）。
- (11) 中野正剛（1886〜1943） 全体主義や南進論を主張した政治家。昭和十八年、反東條運動のため憲兵隊の取り調べを受けたが、釈放後、割腹自殺させられた。
- (12) 三木 清（1897〜1945） 哲学者。自由主義的立場からファッショ政治を批判。昭和二十年三月、治安維持法違反容疑で検挙され、同年九月獄死。
- (13) 戸坂 潤（1900〜45） 唯物論哲学者。「唯物論研究会」を組織し、ファッショ化する時局を批判。昭和十九年投獄。翌二十年、獄死した。
- (14) 豊島教会 東京・板橋区にある妙国寺の前身。当時は、豊島区に所在していたことから豊島教会と称した。
- (15) 細井先生 細井精道師（後の大石寺第66世・日達上人）。当時、東京・池袋にある常在寺住職を務めて

いた。戦前、学会員の授戒は常在寺（昭和四年頃から）、歓喜寮（昭和七年頃から）、砂町教会（昭和十二年頃から）、本行寺（台東区Ⅱ昭和十五年頃から）の四力寺が執り行っており（牧口会長の尋問調書より）、常在寺は日蓮正宗寺院の中でも早期から学会との関係が深かったようだ。これは、おそらく牧口氏の教化親である三谷素啓氏が同じ豊島区内にあった目白学園の校長を務めていたことも関係していたかもしれない。

(16) 由井正雪（1605〜51）Ⅱ江戸初期の軍学者。幕府への批判と旗本救済を掲げ、謀反を企んだが、事前に発覚し、自刃（慶安事件）。後、「慶安太平記」などの素材となり、浄瑠璃や歌舞伎などに劇化され、庶民の共感を呼んだ。

(17) 了性坊問題Ⅱ「大善生活実証録」第五回総会報告の「大法を覲る」と題する戸田理事長の指導の中に、次のような記述がある。

「本月始め私の宅で、六芸社の不振の現状を私に打ちあけて、どうしたらよくなるであろうかと質問された。

そこで、私は大善生活即ち菩薩行こそ幸福の源泉であると信ずるがままに、福田君が、仏として間違つてゐる根元をなほすやう話した。それは、福田君が御本山へ参詣する時、了性坊に宿つて理境坊に移らぬ心境についてなほすやうに話した。そしてつけ加へて言ふたのには、これは商売と関係がないやうだが、これがなほれば必ず商売がよくなる」と（13頁）

総本山塔頭の理境坊が戦前から、創価学会専用の宿坊であったことが知られるが、福田氏としては、静寂な総本山に参詣したときくらい、理境坊でも行われたであろう、出版クラブの例会のときのような叱咤、怒号、威圧が飛び交う「修練」から逃れたかつたのでなからうか。

(18) お題目十五万遍Ⅱ戸田氏は戦後、「妙悟空」のペンネームで執筆した自伝的小説「人間革命」（昭和32年、東京精文館書店刊）の中で、獄中にいるとき、百八十万遍の題目を唱えた頃、「地涌の菩薩」たることを

悟り、広宣流布に挺身することを誓ったと記しているが、終戦直後の創価学会再建途上期に、直接戸田氏本人からか、あるいは戸田氏に極めて近い人から聞いたであろうこの証言はかなり信憑性が高いと思われる。すると、小説の中で述べられ、また戸田氏の遺録を継いだという池田大作氏の「人間革命」の中でも「悟達した」と特筆された二百万遍の唱題は、誇張し脚色された表現である可能性が高いのではなからうか。ちなみに、戸田氏は昭和三十二年、月刊誌の企画で、元日本共産党幹部の神山茂夫氏と対談しているが（「創価学会対共産主義」、「総合」昭和32年9月号所収）、戦時下、戸田氏と同時期に巢鴨拘置所に留置されていた神山氏は、「おれはあんたの『人間革命』という小説を読んだが、あんたの記述はずいぶん違っているよ。警視庁の房の間取りなんか勘違いしている」と指摘されたのに対して、「それは勘違いなんかしていいのだよ。小説というものは……」「あんなもの、ほんとうに書いたらおかしくなるよ」と釈明しているから、多少の脚色・誇張が施されたことは疑いないだろう。

創価教育学会各理事
各支部長
殿

理事長 戸田城外

通 謀

時局下、決戦体制の秋、創価教育学会各員、益々尽忠報国の念を強め、會員一同各職域に於いてその誠心を致し信心を強固にして米英打倒の日まで戦ひ抜かんとす。依つて各支部長は信心折伏について各會員に重ねて左の各項により此の精神を徹底せしめんことを望む。

日、新しい故なきことを切望す。依つて各支部長は信心折伏に於いて各會員に重ねて左の各項により此の精神を徹底せしめんことを望む。

一、毎朝天拝（初座）に於いて御本山の御指示通り、皇祖天照大神、皇宗神武天皇肇国以来御代々の鴻恩を謝し奉り敬神の誠を致し、

一、国運の隆昌、武運長久を祈願すべきことを強調指導すべきこと。

一、学会の精神たる天皇中心主義の原理を会得し、誤りなき指導をなすこと。

一、感情及利害を伴へる折伏はなさざること。

一、創価教育学会の指導は生活法學の指導たることを忘る可からざる

こと。

一、皇大神宮の御札は粗末に取り扱はざる様敬神崇祖の念とこれとを混同して、不敬の取り扱ひなき様充分注意すること。

六月廿五日

創価教育学会各理事
同 各支部長 殿

理事長 戸田城外

通 謀

時局下、決戦体制の秋、創価教育学会各員、益々尽忠報国の念を強め、會員一同各職域に於いてその誠心を致し信心を強固にして米英打倒の日まで戦ひ抜かんとす。依つて各支部長は信心折伏について各會員に重ねて左の各項により此の精神を徹底せしめんことを望む。

一、毎朝天拝（初座）に於いて御本山の御指示通り、皇祖天照大神、皇宗神武天皇肇国以来御代々の鴻恩を謝し奉り敬神の誠を致し、

一、国運の隆昌、武運長久を祈願すべきことを強調指導すべきこと。

一、学会の精神たる天皇中心主義の原理を会得し、誤りなき指導をなすこと。

一、感情及利害を伴へる折伏はなさざること。

一、創価教育学会の指導は生活法學の指導たることを忘る可からざる

こと。

六月廿五日

以上

※注II原文の旧漢字は新字体に改めた。

この文書は日付だけあつて何年に記されたものか不明だが、内容から推察するに、創価教育学会幹部が一斉に検挙される昭和十八年（一九四三）の六月二十五日に作成されたものだろう。なぜなら、極めて逼迫した状況下にあることが切々と伝わってくるからだ。

第一に、会員に遵守すべき項目を五つ羅列し、会員に徹底するよう求めていること。

第二に、一項二項五項に顕著なように、学会は天皇中心主義であることを強調し、更にその元祖たる天照大神を尊崇し、その象徴である御札（大麻）を「粗末に取り扱はざる様」指導していること。本来は「謗法払い」の対象であるはずなのに、だ。

周知のように、昭和十八年七月初めから始まった、牧口常三郎会長・戸田城外理事長をはじめとする創価教育学会幹部の一斉検挙事件の嫌疑は治安維持法違反及び不敬罪であつたが、この天皇中心主義・天照大神尊崇の強調や神札を粗末にせぬようとの指導は同年六月、牧口氏ら教育学会幹部が総本山大石寺に呼ばれ、渡辺慈海宗務総監から「伊勢の大麻を焼却する等の国禁に触れぬよう」との訓戒を受けてのことであつたと思われる。なぜなら「牧口会長はその場では暫く柔かにお受けした」からだ。ところが、「直接には牧口会長の折伏が治安を害するといひ、又神宮に対する不敬の態度があるとして、弾圧の準備が進められたから会長の応急策も己に遅し」「七月六日には伊豆に御旅行中の牧口会長を始め、戸田理事長等が逮捕された」のであつた。（以上、学会版「富士宗学要集」第九巻法難編昭和度⁴³¹頁参照、傍点は引用者）

ここで傍点を振つた「応急策」に注目してもらいたい。「昭和度」を記述した小平芳平創価学会教育学部長はその内容を詳らかにしていないが、「己に遅し」となつた「応急策」とは一体何だつたか？ まさしくそれこそ、切迫した状況下で緊急に作成された「通謀」ではなかつたか。しかし、「通謀」が作成されたのは六月二十五日、それからわずか十日後の七月六日に牧口会長らは逮捕されてしまった。小平氏が言つたとお

り、時「己に遅し」だったのである。こころの辺の状況について、戸田氏は戦後、「牧口会長は、神札は絶対にうけませんと申しあげて、下山したのであった」と述べている（「創価学会の歴史と確信」）。また「年譜 牧口常三郎・戸田城聖」でも、総本山に呼ばれた牧口会長は「神札は絶対に受けません」と断言し、下山」と戸田氏の証言（？）を踏襲している。しかし、これは明らかに「富要集」第九巻における小平氏の記述と食い違っているから、検討の余地がある。戦後の創価学会にとって、戦時下のごく一局面において、止むを得なかったとはいえ、神札を受けとることを認めたことは教義的に「謗法と同罪」を犯したことに他ならず、創価学会の歴史にとって一大汚点であった。したがって、なんとしてもそういう事実はなかったことにしなければならず、「通謀」の否定と謗法と同の本山を諫言したという歴史の歪曲＝美化を図ったのであった。以後、創価学会は池田大作氏の小説「人間革命」をはじめとして、公的出版物においては、戦時中から今日に到るまで一貫して、反戦平和の宗教団体であることをアピールしている。

第三に、「感情及利害を伴へる折伏はなさざること」と折伏の仕方について注意を喚起していること。なぜ、わざわざ折伏の方法についてこのような注意を与えているかといえば、一部学会幹部による折伏のトラブルが一斉検挙の口実を官憲に与えてしまったからだ。具体的に言えば、昭和十八年六月、教育学会中野支部長だった陣野忠夫氏らが折伏中の近所の家の子どもが急死したことを捉えて「罰だ」と決めつけたことから相手が激怒して警察に訴え、これをきっかけにして治安当局の内偵が頻発、ついには一斉検挙へと発展してしまっただ。

以上、各項目を具さに検討してみると、一斉検挙直前の昭和十八年六月二十五日に作成されたことは間違いないだろう。ただし、時すでに遅く、同年六月二十九日には陣野氏ら二人、七月六日には牧口会長ら三人、以降十九年にかけて、東京、神奈川、福岡の幹部が芋づる式に逮捕されていた。

ちなみに、昭和五十年代に第一次創価学会問題が起き、マスコミでも大々的に創価学会の暗部が暴露されたとき、本文書の存在も公表されたが、創価学会はこれを所持していた法華講員の偽造として否定したこと

